

横浜居留地のホテル史(3)

(1859-1899)

澤 護

1881 年

大手のホテルの開業としては、居留地 18-19 番の「ウィンザー・ハウス」がある。このホテルについては、1868 年の「インターナショナル・ホテル」の項で解説しておいた。

一時売りに出されていた「オテル・エ・カフェー・ド・リュニヴェール」は、この年度に経営者を換えて同じ地番で再開されたが、これは新築されたものであった。

この年の 3 月、133 番の「クローセン・ホテル」は火災により焼上したが、まもなく新築されオープンされたので年度の上でいえば、継続して営業されていたことになる。このホテルの変遷については、1878 年の項で触れておいたが、新築されたホテルの規模を示す記録などは全くみあたらない。

スター・ホテル

1879 年から 1880 年には、居留地 136 番に 6, 7 軒の小さな酒場、飲食店、宿泊所があり、フランス人の経営する月極めの「パンション・ブルジョワーズ」の他に「ロンドン・イン」, 「リッチモンド・ハウス」や「ローン・スター」といった安宿があった地番である。

このような宿泊所のひとつに「スター・ターヴァン」があり、その経営者であったマッケンジー (D. McKenzie) は、1880 年 (明治 13) に居留地

136 番から 163 番に移転し、そこに「スター・ホテル」(Star Hotel)を開業した。しかし、マッケンジーは 1881 年中にさらに 102 番に引っ越し、ホテル名を元の「スター・ターヴァン」と改めたため、「スター・ホテル」の名称は、1880 年から 1881 年にかけての 1 年たらずの間にのみその名を留めたにすぎなかった。なお、102 番の「スター・ターヴァン」は、経営者の代替わりはあったが、1885 年(明治 18)まで存続していった。

コマーシャル・ホテル・アンド・ビリヤード・ルーム

1874 年の「横浜ホテル」(108 番)の項で書いたニッケル夫人は、この 108 番のホテルを「リトリート」と改称すると 1877 年 10 月より 1881 年 5 月まで下宿兼宿泊所を開いていた。

そのニッケル夫人が、居留地 31 番に移転し「コマーシャル・ホテル・アンド・ビリヤード・ルーム」(Commercial Hotel and Billiard Room)の経営に乗りだした。1881 年 5 月 9 日のことである。¹²⁰⁾

もともとこの 31 番には、1877 年以降マックカンス(R. McCance)の経営した「コマーシャル」(The Commercial)という宿泊所があって、それが 1879 年に入るとあちこちで顔をだすウィリアム・カーティスに譲られ、1881 年春までカーティスの手にあった。

カーティスは 1880 年にかけて住んだ戸塚に戻り、そこに外国人向けの休憩所を建て、さらにハムやベーコンの製造・販売をするようになったため、31 番の「コマーシャル」をニッケル夫人に譲渡したという経緯がある。

「コマーシャル」は「コマーシャル・ホテル・アンド・ビリヤード・ルーム」と長い名称で 1881 年 5 月にオープンしたものの、持ち主のニッケル夫人が横浜を去ったために翌 1882 年には閉鎖された。

ニッケル夫人が 108 番より 31 番へ移転した理由は不明だが、31 番とは隣地にあたる 61 番に「セントラル・ホテル」もあり、場所的には居留地の中心地だという感覚があつてのことだったろう。

オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール

187番には1874年（明治7）以来「オテル・ド・リュニヴェール」があった地番だが、1879年よりホテルは開店休業の状態が続き、その頃の持ち主・デネオーの住居となっていた。

1880年（明治13）に入り、それまで数年間に渡って174番で雑貨商を営んできたマントラン夫人（**Mme. Mantelin**）が187番の地所を入手して、新しく「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」（**Hôtel et Café de l'Univers**）を開店した。このホテル名は長く、かつてここにあったホテルが「オテル・ド・リュニヴェール」と呼ばれていたこともあって、この方が通り相場の名となった。

旧「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」と新しい同ホテルとの間に若干の空白がみられるが、これは火災に原因があった。この火災についてはすでに記述したことがあるが、居留地187番や133番は後述するホテルと深い関連を持つ地番なので、重複するところもあるが改めて記載しておく。

1880年（明治13）12月20日の深夜、居留地としてはこの冬に入って三度目の火災が、前田橋に近い本村通りの123番から発生した。123番はかつてランガン馬車会社のあった地番で、この時にもジャフレー（**A. Jaffray**）がここで馬車屋を開いていた。

この辺一帯は、居留地内にあって最も人口が密集し、一般に中国人街と呼ばれていたところだが、火事ともなると人々は競って調度品等を狭い道路に運び出し、それが元で消火に手間どり、大火にってしまうという苦い経験を過去にも持つ地域であった。

12月20日の火災で火元となったジャフレーの家は、たまたま彼が鳥撃ちにでかけて不在であったが、消火に駆けつけた人々によって、馬と馬車は安全な地帯に運ばれた幸運はあったものの、すぐに焼け落ちた。これと同時に、裏手にあった124番の「横浜運搬会社」の馬小屋に火が付き、さら

にかつての中国劇場のあった135番や136番、フランス人・パジェス（J. Pages）の126番の住宅に火が回っては、もう手の下しようもなく、あたり一帯は4時間以上にも渡って舐め尽くされた。

前田橋から本村通りに沿った186番までの一帯、飛び火を受けた102, 103, 104, 106番や小さなホテルのあった133番の一角などが焼けだされた上、ドイツ人と思われるふたりの男が犠牲となり、日本人消防隊からも多くの負傷者がでた。死んだひとりのドイツ人は、火事も鎮火の方向に向っていた時、「オテル・ド・リュニヴェール」の壁が崩れ落ち、あっという間に下敷きになったのであった。

この火災の折、「オテル・ド・リュニヴェール」はフランス人のマントラン夫人の手に経営権は移っていたが、彼女は不運にもこの時点で保険を掛けていなかった。しかしながら、彼女はこの不幸をものともせず、この187番に「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」を1881年に建て、1888年まで経営を続けたのだった。

このホテルの経営者はその後に換わったが1892年まで存続し、1893年には「コスモポリタン・ホテル・アンド・レストラン」と改称され、さらに「メトロポリタン・ホテル」への名称変更がなされながら1896年（明治29）まで存続していった。

187番の「オテル・エ・カフェ・デュ・リュニヴェール」は、1887年から1892年にかけて経営者の入れ替わりがかなり激しく、マントラン夫人の他にグレーザール夫人（Mrs. Gleyzar）やニコラス夫人（Mrs. Nicolas）も経営に参加していて、特に1888年以降は専らニコラス夫人によって営業が続けられていた。なお、この地番に関しては、さらに触れることになる。

1880年のこの辺一帯の火災の際に、石造りの家屋や瓦屋根の家屋が延焼を免れたところが多く、フランス人・ジェラル（Alfred Gérard）製の瓦が大いに見直される結果になった。ジェラルは1864年（元治元）に来日し、酒屋、水屋、肉屋、油屋、瓦屋などさまざまな職種に手をだし長く居

留地に居住した人物で、横浜とは非常に深いかわりがあった。この人物については、既に記述したことがある。¹²³

この本村通り 187 番だが、1880 年 1 月 17 日（土）に「カフェ・デュ・グローブ」(Café du Globe) というビリヤード台を備えた飲食店をここに開店¹²³する¹²³とした新聞広告がある。この広告はフランス語紙に掲載され、仏文で書かれているので、氏名の記載はないもののおそらくマントラン夫人がホテル経営に乗りだす前の店舗だったものであろう。

1881 年に横浜にあったホテル

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 20 番)

「ユーレカ・ホテル」(Eureka Hotel 128 番)

「セントラル・ホテル」(Central Hotel 60-61 番)

「フーツ・ホテル」(Foote's Hotel 87 番)

「クローセン・ホテル」(Claussen Hotel 133 番)

「オテル・ペイル・フレール」(Hotel Peyre Frères 84 番)

「ジャーマン・ホテル」(German Hotel 179 番)

「コマーシャル・ホテル」(Commercial Hotel 31 番)

「ヨーロッパ・ホテル」(Europe Hotel 133 番)

「ジャパン・ホテル」(Japan Hotel 40 番)

「オテル・デ・コロニー」(Hôtel des Colonies 52 番)

「ウィンザー・ハウス」(Winsor House 18-19 番)

「スター・ホテル」(Star Hotel 163 番)

「コマーシャル・ホテル・アンド・ビリヤード・ルーム」(Commercial Hotel and Billiard Room 31 番)

「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」(Hôtel et Café de l'Univers 187 番)

1882 年

この年度に「テンペランス・アンド・ファミリー・ホテル」が開かれるが、これは「オテル・ペイル・フレール」の改称で新築されたものではなかった。「ユーレカ・ホテル」と「スター・ホテル」が前年度中に姿を消したため、横浜居留地ホテルは12軒と前年より2軒減少した。

新橋・日本橋間に鉄道馬車がこの年に始めて走り、このため人力車夫が失業し、その組合運動を始めた。

テンペランス・アンド・ファミリー・ホテル

居留地84番にあって親しまれてきた「オテル・ペイル・フレール」は、1882年11月をもって店を閉ざした。しかし、この年の12月には名称を換え「テンペランス・アンド・ファミリー・ホテル」(Temperance & Family Hotel)として、イギリス人のアンソニー (T. B. Anthony) によって営業が続けられることになった。

アンソニーは箱館のイギリス領事館で警護員として数年のあいだ雇用されていた人物だったが、1882年11月に再び横浜に戻ってホテル経営に手をだすことになった。箱館に赴任する前、彼は居留地86番にあった「テンペランス・ホール」(Temperance Hall, 禁酒会) のマネジャーをしていたところから、このホテル名を思いついたのだったが、翌1883年には「コマーシャル・アンド・ファミリー・ホテル」(Commercial & Family Hotel) と名称を改めることになった。いくらなんでも、酒類を提供しないホテル・「テンペランス・ホテル」では具合が悪かったわけである。

アンソニー夫妻による「コマーシャル・アンド・ファミリー・ホテル」の経営は2年で終わり、1884年にはコル夫人 (Mrs. A. H. L. Cole) へ、翌1885年にはランパート夫人 (Mrs. Lampert) へと代替わりしているので、年契約によってペイル兄弟会社より賃貸されていた模様である。なお、このホテルは1886年秋に閉業されるが、この頃夫人の名をとって「ランパー

ト・ファミリー・ホテル」(**Lampert's Family Hotel**)とも呼ばれていた。

1882年に横浜にあったホテル

「グランド・ホテル」(**Grand Hotel** 20 番)

「セントラル・ホテル」(**Central Hotel** 60-61 番)

「フーツ・ホテル」(**Foote's Hotel** 87 番)

「クローセン・ホテル」(**Claussen Hotel** 133 番)

「オテル・ペイル・フレール」(**Hotel Peyre Frères** 84 番)

「ジャーマン・ホテル」(**German Hotel** 179 番)

「ヨーロッパ・ホテル」(**Europe Hotel** 133 番)

「ジャパン・ホテル」(**Japan Hotel** 40 番)

「オテル・デ・コロニー」(**Hôtel des Colonies** 52 番)

「ウィンザー・ハウス」(**Winsor House** 18-19 番)

「コマーシャル・ホテル・アンド・ビリヤード・ルーム」(**Commercial Hotel and Billiard Room** 31 番)

「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」(**Hôtel et Café de l'Univers** 187 番)

「テンペランス・アンド・ファミリー・ホテル」(**Temperance & Family Hotel** 84 番)

1883 年

前年に居留地 133 番の「ヨーロッパ・ホテル」が閉業したが、新たに「ドルフィン・ホテル」が開業したため、ホテル数は前年度と同様に 12 軒であった。新しい名称のホテルとしては、「コロニアル・ホテル」、「コマーシャル・アンド・ファミリー・ホテル」と「オクシデンタル・ホテル」の登場があるが、これら三軒のホテルはいずれも改称されただけのもので新規のオープンではなかった。

ヘフカーズ・ホテル

1883年（明治16）に居留地45番に短期間住んでいたドイツ人・ヘフカー（J. Haefker）は、この年の夏に128番に転居すると、ここに「ヘフカーズ・ホテル」（Haefker's Hotel）を開いた。この地番にかってあった「ユーレカ・ホテル」が、そのまま名前を換えてオープンされただけのことであったから、相いも変わらずの二流のホテルでしかなかった。

このホテルの経営者であったヘフカーは1885年に死去したため、その後は同夫人によって1887年までこのホテルは営業が続けられた。しかし、ヘフカー夫人はかつて「フーツ・ホテル」のあった87番Aに移転し、この地番で同名のホテルの経営に乗りだしたため、128番の「ヘフカーズ・ホテル」の方は「カフェ・エ・レストラン・デュ・ルーブル」へと経営者とホテル名は換わっていった。

87番Aに移転した「ヘフカーズ・ホテル」の方は1891年（明治24）まで開業されていたが、ビリヤード室、食堂の他に20室を持つ家庭的なホテルであった。ヘフカー夫人は1888年中にその経営から手をひき、その後の経営はトムセン夫人（Mrs. J. Thomsen）に任せていた。1891年秋になると、この地番にレオン・ミュラルの経営する「オリエンタル・ホテル」が開業することになり、「ヘフカーズ・ホテル」は閉業された。したがって、「ヘフカーズ・ホテル」は1883年から1887年まで128番にあり、その後は87番Aとふたつの地番にあったわけである。

コロニアル・ホテル

1883年（明治16）10月にフランス人のデシャネルよりイギリス人のバチェラーに譲歩されたとき、52番にあった「オテル・デ・コロニー」は「コロニアル・ホテル」と英語表記に改められた。なお、このホテルの変遷については1880年の「オテル（・エ・レストラン）・デ・コロニー」の項で説明しておいた。

コマーシャル・アンド・ファミリー・ホテル

前年 1882 年の暮れに居留地 84 番でオープンされたホテルを単に名称変更しただけのもので、「テンペランス・アンド・ファミリー・ホテル」の項を参照されたい。

オクシデンタル・ホテル

1880 年（明治 13）に名称変更された「ジャパン・ホテル」が、さらに改称されたもので、1880 年の「ジャパン・ホテル」の項を参照願いたい。

ドルフィン・ホテル（43 番）

パグドン夫人（Mrs. H. Pagdon）の経営する「ドルフィン・ホテル」が、1883 年代に居留地 43 番にあったが、次の年度中に「オールド・ジャパン・ホテル」と代替わりをしたので、極く短期間この名を残したにすぎない。

「ドルフィン・ホテル」（Dorphan Hotel）の名は、1885 年（明治 18）に 41 番にもう一度登場することになるが、これはパグドン夫人のホテルとは何ら関係はない。

居留地 43 番は 210 坪の地所で、その内の半分の敷地にあたる 43 番 B に建てられたホテルは、その後は名称を換えながらも 1887 年（明治 20）まで存続していったので、従来あった店舗を改修したものではなく、おそらく新築したものと推察されるが、それを裏付ける記録はない。また、経営者のパグドン夫人はイギリス人だったが、おそらく 1883 年中に死亡して横浜外人墓地に埋葬されたものとみなされる。

1883 年に横浜にあったホテル

「グランド・ホテル」（Grand Hotel 20 番）

「セントラル・ホテル」（Central Hotel 60-61 番）

「フーツ・ホテル」（Foote's Hotel 87 番）

「クローセン・ホテル」(Claussen Hotel 133 番)
「ジャーマン・ホテル」(German Hotel 179 番)
「ジャパン・ホテル」(Japan Hotel 40 番)
「オテル・デ・コロニー」(Hôtel des Colonies 52 番)
「ウィンザー・ハウス」(Winsor House 18-19 番)
「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」(Hôtel et Café de l'Univers 187 番)
「ヘフカーズ・ホテル」(Haefker's Hotel 128 番)
「コロニアル・ホテル」(Colonial Hotel 52 番)
「コマーシャル・アンド・ファミリー・ホテル」(Commercial & Family Hotel 84 番)
「オクシデンタル・ホテル」(Occidental Hotel 40 番)
「ドルフィン・ホテル」(Dorphan Hotel 43 番)

1884 年

この年度、海岸通りの 5 番に「クラブ・ホテル」が開業されたが、このホテルは後々までも横浜を代表する、しかも多くの話題を残すことになるホテルであった。

新しいホテルとしては、「グローブ・ホテル」と「アメリカン・ホテル」が現れるので、居留地内のホテルの数は前年より増加したが、これら二軒のホテルは極く短期間オープンされたにすぎなかった。

前年にフーツが逝去したために、87 番の「フーツ・ホテル」は年契約によって貸しだされ、「アスター・ハウス」(Astor House) という名前で営業されていた。この「アスター・ハウス」は「ヘフカーズ・ホテル」を経て、「オリエンタル・ホテル」へと換わっていくことになる。

クラブ・ホテル

居留地 5 番に「横浜ユナイテッド・クラブ」が移転したのは、1866 年 11 月の大火の少し前の 7 月のことであった。また、「オランダ貿易会社」が 1867 年 3 月 5 日にこの地番に再建されてから、5 番 A はさまざまな話題を提供する有名な地番となっていたが、1881 年（明治 14）に「オランダ貿易会社」の方は潰れてしまった。

この一角の 5 番 B に「クラブ・ホテル」(Club Hotel) が開業したのは 1884 年（明治 17）1 月 11 日のこと¹²⁴⁾で、それまであった「横浜ユナイテッド・クラブ」の建物を改造したものであった。経営者は本稿でたびたび登場するフランス人のベギューと、かつて雑貨店を経営していたイギリス人のハーン (August A. Hearne) のふたりであったが、ベギューの方は 81 番の「インターナショナル・カフェ・レストラン・エ・オテル」の経営から手を引いたあと、数年間「横浜ユナイテッド・クラブ」のコックとして働いていたことのある人物であった。

「クラブ・ホテル」は 1884 年以降 5 年間ほどは賃貸しでふたりの経営者に権利を与えていたが、ベギューが 1886 年 5 月に神戸でレストラン（後にホテル）経営のため横浜を去ると 1888 年までハーンひとりでの経営が続いた。

開業当初の「クラブ・ホテル」は一般の旅行者より月極めの固定客を相手としていたので、今なら「ペンション」といった性格のものであった。1889 年（明治 22）よりこのホテルの運営に大きな変化が生じ、ホテルは会社組織となり、ハーンは支配人となって運営は数名の人たちに委ねられることになった。ハーンは 1892 年 8 月に 41 歳という若さで逝去したこともあって、経営者や支配人はひんばんに顔ぶれが換わった。ハーンはビゴー (George Bigot) のよき理解者だったものか、支配人時代に「トバエ」の販売に大きく力を貸したりもした。

会社組織となった「クラブ・ホテル」は、まずジョンストン (J. Johnstone)、ヘイマート (J. von Heimert) らを社主として 1889 年（明

治22) 4月1日に新期開業し、翌1890年3月までの1年間で約2万ドル(円)強の純益を計上し、¹²⁵⁾さらに後に居留地40番に「クラブ・ホテル・アネックス(別館)」を、東京築地1番に「ホテル・メトロポール」(Hotel Metropole)を開業するなど、このホテルの成長ぶりは目覚ましいものがあった。

会社組織のホテルとしては、先に「グランド・ホテル」の例を記述しておいたが、「グランド・ホテル」の新しい体制は1889年下半期のことであったから、「クラブ・ホテル」が先鞭をつけたことになる。

1884年1月にオープンした時、5台のビリヤード台とボーリング・アレーがこのホテルの自慢であったが、料理の味がすばらしく、また食事の間には音楽のバンドが入るということで評判を呼んだ。海岸通りに面していたから景観は申し分なかったが、ワグマンは晴れた日には望遠鏡を使えばマダカスカルや喜望峰までもみられるとおどけてみせている。ワグマンは「ジャパン・パンチ」の中で、このホテルについて一頁を当て、飲み物はどれも1セント、宿泊料金は一日12セントと書いているが、これはもちろん面白半分の遊びの記事である。

1889年4月に会社組織になったあと、若干の修理と室内のペンキの塗り代えがなされたが、建物全体は「横浜ユナイテッド・クラブ」時代の二階建て石造りのままで、ボーリング・アレーなどはそのまま引き継がれた。部屋数がどの程度あったかははっきりしないが、13号室は二階にあったので、せいぜい25室を有するホテルでしかなかったと思われる。しかし、1898年(明治31)には一部改築されて部屋数は増加し、この6月にはかなりの利益を計上した。¹²⁶⁾

1899年1月2日、「横浜ユナイテッド・クラブ」の台所より火災が発生したが、発見が早くクラブの図書室に1万円程度の損害をだただけで終わった。しかし、このクラブに面した「クラブ・ホテル」の寝室は水浸しに遇い、またしても改修を余儀なくされたのであった。この結果、ホテルの一

部は三階建ての建物として生まれ変わった。

1902年（明治35）に入ると、「横浜ユナイテッド・クラブ」が隣地の4番に移転したため、この建物を改築しあちこちの造作に手を入れて、27室のきれいなベッド・ルームを作り上げた。これにより、「クラブ・ホテル」は70数室を有することになり、ホテルの間口は10間あまりに奥行き15間ほどとなった。この時期の責任者はリッチフィールド（**Henry C. Litchfield**）であったが、ホテルを直接に担当するマネジャーはひんぱんに換わり、マネジャーによっては何の予告もなしに首を切られ、後に裁判で争うという事件に発展していたこともあった。

1906年（明治39）春、観光客の増加や日露戦争の影響から横浜におけるホテルの絶対数は不足を生じ、このため「クラブ・ホテル」を再建してベッド数を150にする企画が立案されたが、これは話し合いが持たれただけで終わった。この頃のベッド数の不足は横浜に限ってのことではなく、東京の「インペリアル・ホテル」でも70室ほどに150人もの人たちを宿泊させるという事態が持ち上がったりもしていた。日清戦争の折にもベッド数は極端に不足したが、日露戦争凱旋ということで一般観光客の他に大勢の記者が訪日したため、このような事態が生じたのであった。

1907年（明治40）11月28日、旧「横浜ユナイテッド・クラブ」の会議室とホテルとの間にあったボイラー室から出火して、1898年代に改造したホテルの一部を焼いた。この部分は煉瓦造りの三階建ての建物で、その二・三階が客室として使用されていたが、建物自体が老朽化し、春夏の観光シーズンでホテルが満員となった時を除いては使用しなくなっていたため、建物の中央部を完全に焼失したものの死傷者をひとりもださずにすんだのだった。この時の「クラブ・ホテル」の損害額は4万円ほどであったが、この火災から丁度2年後にホテルはもう一度焼け落ち、今度は15万円の損害をだすようになる。

25年以上に渡って親しまれてきた「クラブ・ホテル」は、1909年（明治

42) 12月26日の朝にまたしても発生した火災によって焼失した。¹²⁷⁾この火災の原因はストーブの過熱だったが、正面玄関二階よりでた火は北風に煽られ、一時間たらずの内にホテル事務室、食堂を含め主要部分を舐め尽し、ビリヤード室は水びたしになった。

火災発生当時、ふたりの日本人女性が二階に閉じ込められ、煙に巻かれたという話が流れたがこれはデマでしかなく、25名の宿泊客は朝8時前の火災であったことと、消防隊や停泊中のアメリカ巡洋艦船員たちの救助によって全員怪我もなく救出された。なお、この火災によるホテル側の被害額は15万円にも昇った。

1909年12月下旬はホテルの厄日が続き、「クラブ・ホテル」が焼けた2日後には、「オリエンタル・パレス・ホテル」が貰い火を受けてかなりの損害をだし、さらにその2日後には「グランド・ホテル」でボヤを出したりしている。その都度、近くの商社・商店は書類等をまとめ、商品や家財道具等を安全な場所に運び出すことを余儀なくされたが、欧米人の中には火事と地震を心配するのであれば、とても日本には住めぬという豪の者もいたが、それほど横浜は火災が多かった。

オールド・ジャパン・ホテル（ジャパン・ホテル）

居留地43番Bにあった「ドルフィン・ホテル」は、1884年（明治17）に「オールド・ジャパン・ホテル」（Old Japan Hotel）と名称が変更され、持ち主もジェームズ（T. K. James）へ換わった。これが1886年に「ジャパン・ホテル」と改められ、同じ経営者によって1887年まで開業されていた。

43番は波止場に近く、40番や52番と共に小さなホテル、酒場、サロンが目まぐるしく開店・改称を繰り返していた地番であった。

「ジャパン・ホテル」にしても、5年前まで同地番に同名のホテルがあったので、ここで整理をしておく。

①「ジャパン・ホテル」1869～1879年

モスの経営したホテルで44番にあった。火災後の1876年に43番Aに再建された。

②「ジャパン・ホテル」1880～1883年

ブロックレイ夫人の経営していたホテルで40番にあった。

③「ジャパン・ホテル」1886～1887年

居留地43番Bのホテルで、「オールド・ジャパン・ホテル」を改称したものである。

この43番と背中合せともいうべき51番に、また同名のホテルが開業される。

④「ジャパン・ホテル」1889～1891年

ヘルツの経営する51番のホテルだが、上記の四ホテルはほぼ同じ地番にあっただけに、年代や持ち主には大いに気を配る必要がある。

なお、1885年の「オールド・ジャパン・ホテル」の広告によると、このホテルの持ち主はレオナード (Lilian Leonard) 嬢で、彼女の管理のもとで再開店されたと記載されているが、年度毎のディレクトリーではジェームズが所有者と記録されている。先の広告には、英・米の最高のビリヤード台を有する個別のビリヤード室が3室併設されているとあるが、ホテルの規模など記述はない。

コンコルディア・ホテル

居留地179番Cにあった「ジャーマン・ホテル」は、開業して5年後の1884年に閉業され、経営者のフォルハルドは116番に住まいを替えた。

このホテルは、それまで73番のラングフェルド・マイヤーズ商会で働いていたドイツ人のウィット (H. C. N. Witt) に譲渡され、「コンコルディア・ホテル」(Concordia Hotel) と名称を改めて営業が続けられることになった。「コンコルディア・ホテル」は1884年から1893年までの長い間ウィット夫妻によって経営されたが、酒場が付随していたこと以外ホテル

の規模などを伝える記録はないので、長期滞在者や月極めなどの固定客を相手にしたホテルであったとみなされる。¹²⁹⁾

179番の地所は、居留地で最初のホテル「横浜ホテル」のあった70番に近い位置で、一時期「ジャーマン・クラブ」が置かれていたところであった。

グローブ・ホテル

1885年版と1887年版との『ジャパン・ディレクトリー』には、居留地83番に「グローブ・ホテル」(Globe Hotel)が開業されていたように記録しているが、この持ち主や経営者についての記録はない。筆者は後に70番で、次で52番で「横浜ホテル」を経営するようになるウェールズ夫人(Mrs. A. Wales)が1884～1885年頃の一時期開いたホテルだったと推定している。

ウェールズ夫人は、ホッジス夫人が娘たちと一緒に居留地83番で開いていた雑貨・帽子製造店で1881年頃に働いていた女性だったので、この同じ地番にホテルを開いたものと思われる。彼女は1885年暮れには70番の「横浜ホテル」の経営に携わるので、「ディレクトリー」には記録されてはいるものの、1884年後半よりせいぜい1年間存在しただけのホテルと考えている。

なお、1867年に居留地81番に同名のホテルがあったが、これとは全く関係がない。

アメリカン・ホテル

居留地160番に、1884年の短期間「アメリカン・ホテル」(American Hotel)があったが、この年には「アスター・ハウス」(Astor House)と名前を換えたため、その経営者すら明らかにすることはできない。

この年には87番の「フーツ・ホテル」の流れを汲む「アスター・ハウス」があったので、ことによったら160番と87番の「アスター・ハウス」の経営者は同じ人であった可能性がある。1884年代の87番の「アスター・ハウ

ス」はネーデルソウル夫人 (**Mrs. H. Nethersole**) が経営者だったので、160番の「アメリカン・ホテル」の方にも関与していたのかも知れない。

小さなホテルや下宿の多くは夫人による経営がよくあったが、夫の方は商社に勤めたり船員が多かった。ネーデルソウル夫人の場合も同様に、夫の方は三菱郵船の船に乗る高級船員であったから、三菱郵船雇用の船員目当ての下宿を開いたとすれば辻つまは合う。

1884年に横浜にあったホテル

「グランド・ホテル」(**Grand Hotel** 20番)

「セントラル・ホテル」(**Central Hotel** 60-61番)

「クローセン・ホテル」(**Claussen Hotel** 133番)

「ジャーマン・ホテル」(**German Hotel** 179番)

「ウィンザー・ハウス」(**Winsor House** 18-19番)

「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」(**Hôtel et Café de l'Univers** 187番)

「ヘフカーズ・ホテル」(**Haefker's Hotel** 128番)

「コロニアル・ホテル」(**Colonial Hotel** 52番)

「コマーシャル・アンド・ファミリー・ホテル」(**Commercial & Family Hotel** 84番)

「オクシデンタル・ホテル」(**Occidental Hotel** 40番)

「ドルフィン・ホテル」(**Dorphan Hotel**, 43番)

「クラブ・ホテル」(**Club Hotel** 5番)

「オールド・ジャパン・ホテル」(**Old Japan Hotel** 43番B)

「コンコルディア・ホテル」(**Concordia Hotel** 179番C)

「グローブ・ホテル」(**Globe Hotel** 83番)

「アメリカン・ホテル」(**American Hotel** 160番)

1885 年

新しいホテルとしては、「オテル・デュ・コメルス」,「ドルフィン・ホテル」と「横浜ホテル」の三軒があったが、前二者は名称変更されただけのものであった。なお,「ドルフィン・ホテル」は41番に開業されたもので、43番の「ドルフィン・ホテル」の方は前年に閉業された。新規オープンのホテルは70番の「横浜ホテル」ただ一軒であった。

オテル・デュ・コメルス

1885年(明治18)に居留地133番にあった「クローセン・ホテル」はフランス人のサルディニュ(D. Surdaigne)に譲渡され,「オテル・デュ・コメルス」と改称した。「クローセン・ホテル」は1881年に火災に遇ったあとすぐに新築されたホテルで,かなり大きなものだったという記事のみが残されている。

「オテル・デュ・コメルス」(Hôtel du Commerce)は,1904年(明治37)までの長い間この地番にあったが,サルディニュが不在であった1887年から約2年ほど閉鎖されたままであった。このホテルは一般の旅行者のためのホテルではなく,むしろ日本郵船などで働く外国人が自分たちの住まい代わりに使っていたいわば固定客用のホテルであった。

なお,サルディニュは1909年(明治42)に横浜で逝去し,横浜外人墓地に埋葬された。彼は短期間ではあったが,177番の「オテル・ド・パリ」の経営に携わったこともあった。

ドルフィン・ホテル (41 番)

居留地41番には,「マリーヌ・ホテル」,「カンブリアン・ホテル」がかってあったが,しばらくの空白期間をおいて1885年(明治18)に「ドルフィン・ホテル」が開業された。

持ち主は一時期ワインやビールの保管業をしていた「スパン商会」(R.

Spahn & Co.) で働いていたハスケル (W. Haskell) だったが、翌 1886 年には「ヨーロッパ・ホテル」と名を改めたので、前年にあった 43 番のパゲドン夫人の経営した「ドルフィン・ホテル」と同様に 1 年たらずでその名称はなくなった。

この地番付近には、「ジャパン・ホテル」、「オクシデンタル・ホテル」や「横浜ホテル」が 1886 年代にあったが、そのいずれもが「旅館」というより「酒館」というものであったから、一般の旅行者の手記などに書き留められなかったのも無理はない。なお、「ドルフィン・ホテル」は 1886 年に「ヨーロッパ・ホテル」と名称が変更になった。

横浜ホテル (70 番, 52 番)

1885 年 (明治 18) に居留地 83 番の「グローブ・ホテル」から手を引いたウェールズ夫人 (Mrs. Wales) は、この年の秋頃に 70 番に移転して「横浜ホテル」を開業した。1885 年当時の 70 番はジャパン・ガゼット社、赤門で有名だったカール・ローデ商会などいくつもの店舗の立ち並ぶ場所だったが、ここにあった家屋のひとつ、おそらく骨董店がホテルとして使用されたものとみなされる。

70 番の「横浜ホテル」は 1887 年まで続いたが、この年度に 52 番に移転するとまたも同じ名のホテルをここに開いた。52 番の「横浜ホテル」は 2 年で閉業されたが、この地番のホテルの変遷は実に複雑で、また代替わりの激しいところなので、1880 年の「オテル・エ・レストラン・デ・コロニー」の項で簡単にまとめておいた。

ウェールズ夫人は、1889 年後半にこのホテルを去ると、128 番にしばらく住んだ。この 128 番には、かつて「ベルリン・ホテル」や「ヘフカーズ・ホテル」のあった地番なだけに、記憶されていることと思われる。

「横浜ホテル」は明治 10 年以前に別の経営者によって三カ所に開かれたが、ロプケ夫人とウェールズ夫人の 70 番と 52 番を加えると、「横浜ホテル」

の名称は実に六回も登場したわけである。なお、本稿では触れることはできないと考えられるが、1900年代に入ってさらに別の「横浜ホテル」が開業していくこともあった。

再三に渡って開かれた「横浜ホテル」について、ここで整理してみると次のようになる。

- ①「横浜ホテル」 1860年開業 居留地70番。
- ②「横浜ホテル」 1869年開業 居留地37番。
- ③「横浜ホテル」 1874年開業 居留地108番。
- ④「横浜ホテル」 1878年開業 居留地70番。
- ⑤「横浜ホテル」 1885年開業 居留地70番。
- ⑥「横浜ホテル」 1887年開業 居留地52番。

1885年に横浜にあったホテル

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 20番)

「クローセン・ホテル」(Claussen Hotel 133番)

「ウィンザー・ハウス」(Winsor House 18-19番)

「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」(Hôtel et Café de l'Univers 187番)

「ヘフカーズ・ホテル」(Haefker's Hotel 128番)

「コロニアル・ホテル」(Colonial Hotel 52番)

「コマーシャル・アンド・ファミリー・ホテル」(Commercial and Family Hotel 84番)

「オクシデンタル・ホテル」(Occidental Hotel 40番)

「クラブ・ホテル」(Club Hotel 5番)

「オールド・ジャパン・ホテル」(Old Japan Hotel 43番B)

「コンコルディア・ホテル」(Concordia Hotel 179番C)

「グローブ・ホテル」(Globe Hotel 83番)

「オテル・デュ・コメルス」(Hôtel du Commerce 133 番)

「ドルフィン・ホテル」(Dorphan Hotel 41 番)

「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 70 番)

1886 年

この年度、居留地 18・19 番にあり「インターナショナル・ホテル」や「ウィンザー・ハウス」として親しまれてきたホテルが、隣地 20 番の「グランド・ホテル」に合併・統合され、「ウィンザー・ハウス」の名称は消えることになった。

新しいホテル名としては 43 番の「ジャパン・ホテル」があるが、これは「オールド・ジャパン・ホテル」を単に改称しただけに過ぎない。また、「ヨーロッパ・ホテル」にしても前年に開業されたばかりの「ドルフィン・ホテル」の名称変更であったから、この年度に新規開業されたホテルはなかった。

1880 年代にオープンされたホテルは小規模なものが多かったため、新聞広告などで報知することもあまりなく、それだけに正確な月日を知ることには不可能に近いといってもよい。また、一般の旅行者が宿泊することもなかったから、多くの紀行文に現れることもない。

ヨーロッパ・ホテル

1886 年に居留地 41 番の「ドルフィン・ホテル」は「ヨーロッパ・ホテル」(Europe Hotel) と名称を改めたが、経営者のハスケルはそのまま、彼による経営は 1888 年まで続いた。

41 番の「ヨーロッパ・ホテル」は、1895 年(明治 28)まで存続したが、1888 年以降その経営者はベルコヴィッチ(Bercovich)、ドーネンベルグ(J. C. Donnenberg)、ゴールドマン夫妻(A. Goldman)、スパント(A. Spunt)と 1 年ないし 3 年で代替わりをしている。居留地 40 番と 41 番のホテルは、

いつの時代でもかなり代替わりが激しい酒場兼用の宿であった。

41番に「ヨーロッパ・ホテル」があった1893年には、81番にもハーリー (John Harry) の経営する「ヨーロッパ・ホテル」が短期間あった。幕末期にホテルやレストランを開業する際には届け出を必要とする時期もあったが、明治20年代は同じホテル名を付けても何ら支障がなかったものとみえる。

新しい経営者によるとしたベルコヴィッチとドーネンベルグの広告では、¹³⁰⁾「ヨーロッパ・ホテル」はイギリス波止場に近い41番にあり、ビリヤード・ルームとバーとが併設され、寝室は清潔で明かるく、備えつけ家具は上等としてある。また、週や月極めの宿泊も可能とも広告しているが、規模等の記載はない。

1886年に横浜にあったホテル

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 20番)

「ウィンザー・ハウス」(Winsor House 18-19番)

「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」(Hôtel et Café de l'Univers 187番)

「ヘフカーズ・ホテル」(Haefker's Hotel 128番)

「コロニアル・ホテル」(Colonial Hotel 52番)

「コマーシャル・アンド・ファミリー・ホテル」(Commercial & Family Hotel 84番)

「オクシデンタル・ホテル」(Occidental Hotel 40番)

「クラブ・ホテル」(Club Hotel 5番)

「コンコルディア・ホテル」(Concordia Hotel 179番C)

「オテル・デュ・コメルス」(Hôtel du Commerce 133番)

「ドルフィン・ホテル」(Dorphan Hotel 41番)

「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 70番)

「ヨーロッパ・ホテル」(Europe Hotel 41 番)

「ジャパン・ホテル」(Japan Hotel 43 番)

1887 年

70 番にあった「横浜ホテル」がこの年度に 52 番に移転開業したが、これはそれまでここにあった「コロニアル・ホテル」の後に入ってオープンしただけのものであった。他に 5 軒の新しいホテル名が登場するが、すぐに名称が換わったりするため、その追跡は容易ではない。

1884 年頃から 1890 年にかけて新規開業されるホテルは、いずれも小さな規模のものばかりで、当時の広告さえもみつからない。

オテル・エ・レストラン・デュ・ルーブル

居留地 128 番にあった「ヘフカーズ・ホテル」が 1887 年中に 87 番 A に移転したあと、ここにフランス人・シャペル (Joseph Chappelle) によって「オテル・エ・レストラン・デュ・ルーブル」(Hôtel et Restaurant du Louvre) が開店された。

この地番でホテルを開く前には、シャペル夫人が 162 番で数年「レストラン・デュ・ルーブル」を経営していたので、このホテルも彼女が実質上は運営していたようである。しかし、1888 年 (明治 21) 中には閉業してしまったので 1 年ほどの開業でしかなかった。

シャペル夫人はその後 1 年ほどこの地番にいたが、1890 年には 52 番の「横浜ホテル」の経営から手を引いたウェールズ夫人がここに移転してきているだけに、記録ではでてこないが下宿屋でも開いていたものと思われる。

コマーシャル・ホテル

居留地 61 番にはさまざまなホテルがあったが、他に大きなノース・レイ薬店 (North & Rae Co.) やファルサリ写真館 (A. Farsari & Co.) もこ

の地番にあった。ファルサリ写真館は1886年に17番に移転したので、この後にできた店舗が「コマーシャル・ホテル」だったとみなされる。

1887年に61番に開かれた「コマーシャル・ホテル」(Commercial Hotel)はヨーマンズ夫妻(H. Yeomans)によって2年間経営されただけで終り、1889年以降夫妻は居留地187番に移りこの場所で「コマーシャル・イン」(Commercial Inn)の経営者となっていった。同じ時期、この187番には「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」があったが、このホテルの変遷については1881年の項で触れておいた。

1886年頃にコル夫人が70番で「コマーシャル・ホテル」を開いたとする記録(『ジャパン・ディレクトリー』1886年版)もあるが、彼女は1884年中に横浜で逝去しているだけにこれは疑問である。

トラベラーズ・ホテル

居留地136番は三区轄に分けられていたが、そのC番は153坪で、ここに「トラベラーズ・ホテル」が1887年(明治20)後半に建てられた。ホテルの持ち主はサミュエル(J. Samuel)とあったが、彼の足取りもまたホテルの規模を伝える記録も全くない。

「トラベラーズ・ホテル」(Traveller's Hotel)は1889年まで続いたが、この年にカーティス(James Curtis)とキング(Tom. King)に譲渡され、「コスモポリタン・ホテル」と名称を改めた。ふたりによる共同経営は1892年まで続いたが、かつて187番にあった「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」の後に移転すると、さらに「コスモポリタン・ホテル・アンド・レストラン」(Cosmopolitan Hotel & Restaurant)と換えた。

居留地136番Cと187番は地番が表面的にかなりかけ離れているが、実は細い道を挟んだ目と鼻の距離で、位置としては187番の方が広い本村通りに面していただけに、利用者にとっては187番の方が便利であった。

「コスモポリタン・ホテル」が去った居留地136番はしばらく借り手が付

かなかったが、1896年に入ってブラウン（**Joseph Brown**）が経営に乗りだし、ホテル名をまたも「コスモポリタン・ホテル」として、1898年まで経営を続けた。つまり、同じ地番に経営を異にした「コスモポリタン・ホテル」がふたつ存在したことになる。また、1867年（慶応3）には、すぐ近くの133番にやはり「コスモポリタン・ホテル」があったから話しは実に複雑である。

居留地136番はホーム、ハウス、ターヴァンといった下宿が猫の目のように変った地番だが、ホテルと名のつく宿泊所が開かれるのは1887年以降のことである。この地番の変遷を簡単にまとめて、1889年の頃の「カナディアン・ホテル」の中で記述してあるので、そちらも参照願いたい。

コスモポリタン・ホテル（40番）

1887年から翌年にかけて居留地40番にブライト夫人（**Mrs. A. L. Bright**）の経営する「コスモポリタン・ホテル」（**Cosmopolitan Hotel**）があった。この時期、同地番には「オキシデンタル・ホテル」があり、隣地には「ヨーロッパ・ホテル」があったから、波止場に近いこの一角は相変らず船乗り目当ての安宿や酒場が密集していたわけである。

ブライト夫人の「コスモポリタン・ホテル」は1888年中になくなり、彼女も横浜を去ったので詳細は不明だが、このホテルの開業は1887年（明治20年）後半だったものとみなされる。なお、「トラベラーズ・ホテル」の中で記述した136番の「コスモポリタン・ホテル」とはなんら関係もなく、後年さらに「コスモポリタン・ホテル・アンド・レストラン」も開かれていくので、地番と開業年代には気を配る必要がある。

ブリュンズウィック・ホテルと横浜ホテル

1886年に居留地52番の「コロニアル・ホテル」はランドベルグ夫人（**Mrs. C. A. Lundberg**）の手で経営されるようになったが、この年の暮れ

か1887年初頭に「ブリュンズウィック・ホテル」(Brunswick Hotel)と名称変更をした。しかし、彼女は1887年中に70番にあったウェールズ夫人の経営した「横浜ホテル」の後に入ったので、このホテル名は1887年の極く短い期間その名を留めただけであった。

一方、70番の「横浜ホテル」はこの年に52番に移転して同名のホテルを開いたので、この年度「横浜ホテル」は70番と52番とにあったことになる。記事にすると複雑になるが、52番にいたランドベルグ夫人が70番に引越し、70番にいたウェールズ夫人が52番に移転し、お互のホテルを取り換えたわけである。ランドベルグ夫人はその後ホテル経営を諦め1888年1月横浜を去ったので、52番のホテルの方が規模としては大きかったのであろう。

1887年に横浜にあったホテル

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 18-20番)

「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」(Hôtel et Café de l'Univers 187番)

「ヘフカーズ・ホテル」(Haefker's Hotel 87番A)

「オクシデンタル・ホテル」(Occidental Hotel 40番)

「クラブ・ホテル」(Club Hotel 5番)

「コンコルディア・ホテル」(Concordia Hotel 179番C)

「オテル・デュ・コメルス」(Hôtel du Commerce 133番)

「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 70番→52番)

「ヨーロップ・ホテル」(Europe Hotel 41番)

「ジャパン・ホテル」(Japan Hotel 43番)

「オテル・エ・レストラン・デュ・ルーブル」(Hôtel et Restaurant du Louvre 128番)

「コマーシャル・ホテル」(Commercial Hotel 61番)

「トラベラーズ・ホテル」(Traveller's Hotel 136番C)

「コスモポリタン・ホテル」(Cosmopolitan Hotel, 40 番)

「ブリュンズウィック・ホテル」(Brunswick Hotel 52 番)

1888 年

新しいホテルはこの年度に開業されず、これに対し、「ジャパン・ホテル」など三軒が閉業したので、前年の 15 軒より 12 軒に減少した。

前年、内地雑居説が流れ、どこも地価が激変し、中でも横浜は最も下落して地租と金利に追われる者が続出した。しかし、この年に横浜築港着手の巷説が伝播すると、また地価は騰貴し、高島町辺は 5, 6 円の旧価が 12 円に、神奈川駅埋立地辺が 4, 5 円から 10 円以上にもなった。

1888 年に横浜にあったホテル

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 20 番)

「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」(Hôtel et Café de l'Univers 187 番)

「ヘフカーズ・ホテル」(Haefker's Hotel 87 番 A)

「オクシデンタル・ホテル」(Occidental Hotel 40 番)

「クラブ・ホテル」(Club Hotel 5 番)

「コンコルディア・ホテル」(Concordia Hotel 179 番 C)

「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 52 番)

「ヨーロッパ・ホテル」(Europe Hotel 41 番)

「オテル・エ・レストラン・デュ・ルーブル」(Hôtel et Restaurant du Louvre 128 番)

「コマーシャル・ホテル」(Commercial Hotel 61 番)

「トラベラーズ・ホテル」(Traveller's Hotel 136 番 C)

「コスモポリタン・ホテル」(Cosmopolitan Hotel 40 番)

1889 年

新しい名称のホテルが4軒オープンされるが、いずれのホテルも簡易宿泊所の域をでるものではなかった。

1880年から1889年にかけての10年間、横浜居留地内では移転改称のホテルも含め35軒もが新規開店をしていったが、そのほとんど全てが小規模のホテルで、横浜を代表するホテルへと発展していったものではなく、ホテルの不毛時代であった。

明治22年は憲法発布の年で、このお祝いのためちょうちんが1円50銭から7円50銭に高騰したほか物価の便乗値上げが続き、旅館の宿泊料も2倍になった。当時の新聞記事に「提灯も高い、宿料も上る」とある。

カナディアン・ホテル

『カナディアン・ホテル』(Canadian Hotel)が居留地136番にあったとする記録は、『ジャパン・ディレクトリー』(1890年版)しかない。この版では持ち主をウォーカー(W. Walker)としているが、この頭文字がウィリアムなのかウィルソンなのか確定できないため、調査は少しも進展しないままである。

「カナディアン・ホテル」と「コスモポリタン・ホテル」が136番に、「トラベラーズ・ホテル」が137番にあったようにこの版では記載しているが、実際にはいずれも同じ136番にあったホテル名だったと思われる。「トラベラーズ・ホテル」の方は「コスモポリタン・ホテル」へと改称されていったのは先に記述しておいた通りである。

1889年(明治22)、居留地136番には「トラベラーズ・ホテル」とは別にウォフター(P. Wafter)の経営するペンション「シャムロック・サロン」(Shamrock Saloon)があった。このペンションがこの年度に81番に移転したため、空家となった136番の店舗に「カナディアン・ホテル」がオープンしたものと判断される。

居留地 136 番は 1872 年（明治 5）の「セイラーズ・ホーム」(**Sailor's Home**) 以来、実に多くの酒場などができては潰れていった場所で、ひとたびこの附近で火災が発生すると、たちまちのうちに群集が暴徒と化し、集団で他人の家に押し入っては略奪を繰り返えすといった事件がよくあった限界である。

コスモポリタン・ホテル

居留地 136 番の「コスモポリタン・ホテル」は、1889 年から 1892 年にかけてあり、「トラベラーズ・ホテル」の後を継いだものであった。この経営者などに関しては、1887 年の「トラベラーズ・ホテル」の項で触れてある。

「コスモポリタン・ホテル」は 1887 年に居留地 40 番にもあり、また 136 番には改めて 1896 年に同名のホテルがオープンされるので混同しがちである。

ファルコン・ホテル

居留地 97 番は幾多のホテルが明治初年まであった地番だが、1889 年（明治 22 年）に入って「ファルコン・ホテル」(**Falcon Hotel**) がハウエステイン (**L. Hauestein**) によって開業された。

「ファルコン・ホテル」は 1894 年まで存在したが、この年に「クリテリヨン・ホテル」と改称された。新規オープンされたホテルだったと推察されるが、記録は一切ない。

ジャパン・ホテル

1889 年秋より約 2 年間、「ジャパン・ホテル」が居留地 51 番の一角にあった。51 番は 447 坪の敷地で、ここには「ジャパン・メール」新聞社の他に洋品店、理髪店、書店など 5 軒ほどが密集しあっていたところであった。

経営者はヘルツ (**Ch. Heldt**) だったが、1890 年には沖仲仕や運搬業にたずさわっていたヘルム商会 (**P. Helm & Co.**) に雇用されているので、名

ばかりのホテルだったといえるだろう。

1889年に横浜にあったホテル

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 18-20番)

「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」(Hôtel et Café de l'Univers 187番)

「ヘフカーズ・ホテル」(Haefker's Hotel 87番A)

「オクシデンタル・ホテル」(Occidental Hotel 40番)

「クラブ・ホテル」(Club Hotel 5番)

「コンコルディア・ホテル」(Concordia Hotel 179番)

「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 52番)

「ヨーロッパ・ホテル」(Europe Hotel 41番)

「トラベラーズ・ホテル」(Traveller's Hotel 136番)

「カナディアン・ホテル」(Canadian Hotel 136番)

「コスモポリタン・ホテル」(Cosmopolitan Hotel 136番)

「ファルコン・ホテル」(Falcon Hotel 97番)

「ジャパン・ホテル」(Japan Hotel 51番)

1890年

居留地40番の「オクシデンタル・ホテル」がこの年度に閉業した。また、「シャムロック・サロン」の流れを汲む「カナディアン・ホテル」も看板をおろした。居留地内のホテルは10軒で、新規開業のホテルはない。

この年の10月、東京ではベルリン留学より戻った渡辺温の設計した「帝国ホテル」が華々しく開業され大きな話題を提供することになった。

居留地133番の「オテル・デュ・コメルス」は、持ち主のサルディニュが不在であったため一時休業をしていたが、この年に同じ地番で再開された。

「グランド・ホテル」は隣接地 18・19 番に新館を増築していたが、この年の 6 月にそれが完成し日本最大のホテルとなった。これら二軒のホテルは 1885 年と 1873 年の当該個所で触れてある。

1890 年に横浜にあったホテル

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 18-20 番)

「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」(Hôtel et Café de l'Univers 187 番)

「ヘフカーズ・ホテル」(Haefker's Hotel 87 番 A)

「オクシデンタル・ホテル」(Occidental Hotel 40 番)

「クラブ・ホテル」(Club Hotel 5 番)

「コンコルディア・ホテル」(Concordia Hotel 179 番 C)

「ヨーロッパ・ホテル」(Europe Hotel 41 番)

「カナディアン・ホテル」(Canadian Hotel 136 番)

「コスモポリタン・ホテル」(Cosmopolitan Hotel 136 番)

「ファルコン・ホテル」(Falcon Hotel 97 番)

「ジャパン・ホテル」(Japan Hotel 51 番)

「オテル・デュ・コメルス」(Hôtel du Commerce 133 番)

1891 年

三軒の新しいホテルがオープンされたが、このうち「オリエンタル・ホテル」は「グランド・ホテル」に次ぐ横浜での代表的なホテルへと成長していった。87・88 番の「オリエンタル・ホテル」は 1894 年に火災のため焼上し、次で海岸通り 11 番に新築されるようになるが、このホテルも後に全焼した。なお、この頃に船員宿泊所（セイラーズ・ホーム）を建築しようとの声が居留民有志の間で起こり、真剣な討議が再三なされた。

インターナショナル・ホテル

1891年（明治24）に居留地188番に「インターナショナル・ホテル」（**International Hotel**）がリュチーニ（**C. Lucini**）によって開業されたが、新築されたホテルではなく中国人経営の店舗を改修したものであった。

このホテルではパンを製造・販売したこともあって、「インターナショナル・ホテル・アンド・ベーカリー」とも呼ばれ、リュチーニの経営は1896年（明治29）まで続いた。その後はバーマン夫人（**Mrs. Barman**）やホインスタイン夫人（**Mrs. Hoinstein**）によって1907年（明治30）まで開業されていたが、1896年にバーマン夫人に経営権が譲られた後は、一貫して「インターナショナル・ホテル」の名称が用いられた。

なお、188番の地所は瓦で有名なジェラルド（**Alfred Gérard**）が、酒や肉を売り、水を売り、瓦を売った店舗が長い間あったところであった。

オリエンタル・ホテル

居留地87番Aは「フーツ・ホテル」があり、1887年より「ヘフカーズ・ホテル」があった地番だが、ここにフランス人のレオン・ミュラル（**Léon Muraour**）が、1891年に「オリエンタル・ホテル・エ・レストラン・フランセ」（**Oriental Hotel et Restaurant Français**）という長い名前のホテルをオープンした。

1883年にフーツが死んだあと、「フーツ・ホテル」は賃貸されたものと思われ、それがヘフカー夫人に貸し与えられたものと判断される。L. ミュラル夫人はフーツの娘であったから、年契約による賃貸が終ったあと、ここにミュラルが「ヘフカーズ・ホテル」の後を受け継ぎ、これを改修して開業したものであろう。

長いホテル名は「オリエンタル・ホテル」と呼ばれる方が多く、87番Aの裏手や88番にも新しい建物が増築されていた。この頃の部屋数は「グランド・ホテル」に次ぐものだったが、その正確な数は不明である。増築

後の記録がみつければもう少し書きようもあるが、87番と88番の地所を合わせると1,078坪もあったところだけに、かなり大きな規模のホテルに発展していただろうとしか言いようがない。

『ジャパン・ディレクトリー』の1892年版の87 A 番をみると、ここにはまだ「ヘフカーズ・ホテル」が記載されているだけで「オリエンタル・ホテル」の名はない。しかし、この版の変更欄には「87 オリエンタル・ホテル・アンド・レストラン・フランセ」と明記されているので、1891年後半の開業は間違いない。この時の広告では一流のファミリー・ホテルとし、広々としたバー、ビリヤードとカード・ルーム、食堂の併設を伝えているだけである。

1894年（明治27）11月19日の午後11時45分に、火災発生のお知らせが「横浜消火組」（Yokohama Fire Brigade）に届いた。早速、大勢の消防員を召集し現場に駆けつけてみると、火事は「オリエンタル・ホテル」より発生していた。¹³¹

消防隊が到着した時には、ホテルの最上階が火に包まれ、炎は猛烈な勢いで下部に広がりつつあった。このため消防隊はホテル本館に付随する別館に火が回らないよう迅速でしかも勇敢な行動をみせ、幸いにも88番のアネックスなどへの延焼はくい止められたものの、87番Aの旧館部分は焼け落ち、火災発生から4時間後にやっと鎮火することができた。

火の回りが極めて早かったが、第一発見者が急ぎホテルの持ち主や宿泊客を起こしたこともあって死傷者をださずにすんだが、火災原因の方は謎に包まれたままであった。

この火災により、持ち主のレオン・ミュラールは居留地87・88番の「オリエンタル・ホテル」の経営を断念し、海岸通りに新しい大型ホテルを建築することにしたのであった。海岸通り11番に新築される「オリエンタル・ホテル」とレオン・ミュラールについては、1898年の項で記述しておいたが、このホテルもまた火災に会うことになる。

クラブ・ホテル・アネックス

居留地40番は1880年（明治13）以降、「ジャパン・ホテル」や「オキシデンタル・ホテル」が1890年まであった地番だが、1891年（明治24）に入り会社組織の「クラブ・ホテル」の別館「アネックス」がここにオープンされ、支配人としてライト（Henry Nichol Wright）が任命された。しかし、ライトはこのホテルの隣に「ライト・ホテル」を新築して経営に乗りだしたため、短期間で「アネックス」の支配人の地位をおりた。

「クラブ・ホテル・アネックス」が新築されたものか、それまであった「オキシデンタル・ホテル」を改修してオープンしたものか断定できないが、地下にバーを持ち、二階建てのホテルでありながら、数台のビリヤード台がある部屋数10室ほどの規模であったから、おそらく後者と考えてよいだろう。それでいながら、1892年3月の決算期においては約400ドルほどの利益を上げていた。この時期、「クラブ・ホテル」は居留地5番に本館を持ち、東京にも新しい「クラブ・ホテル」をオープンさせて、株式組織によるホテルの経営は極めて順調な伸展をみせていた。

しかし、40番の「クラブ・ホテル・アネックス」は、開業して2年もたたないうちに消滅してしまった。これも、自ら出した火災が原因であった。¹³²⁾ 1893年（明治26）3月8日早朝、このホテルの一階1号室付近より火災が発生したが発見が早く、宿泊客数名が消火に当たったものの煙が充満し、2号室に火が付くともう手の打ちようがなく、消防隊が現場に到着した時には二階部分にも火の手が上っていた。

ホテルは1時間ほどで焼け落ち、その後なおも燻り続けた。焼け跡からがっちりした男の焼死体がみつかったが、検死と証言の結果、この死体はライトの後を継いで支配人となったイギリス人のピーブルズ（John Arthur Peebles）と確認された。このようにして、「クラブ・ホテル」と同様に「アネックス」も火災が原因で姿を消した。

1891 年に横浜にあったホテル

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 18-20 番)

「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」(Hôtel et Café de l'Univers 187 番)

「ヘフカーズ・ホテル」(Haefker's Hotel 87 番 A)

「クラブ・ホテル」(Club Hotel 5 番)

「コンコルディア・ホテル」(Concordia Hotel 179 番 C)

「ヨーロッパ・ホテル」(Europe Hotel 41 番)

「コスモポリタン・ホテル」(Cosmopolitan Hotel 136 番)

「ファルコン・ホテル」(Falcon Hotel 97 番)

「ジャパン・ホテル」(Japan Hotel 51 番)

「オテル・デュ・コメルス」(Hôtel du Commerce 133 番)

「インターナショナル・ホテル」(International Hotel 188 番)

「オリエンタル・ホテル・エ・レストランフランセ」(Oriental Hotel et Restaurant Français 87 番 A)

「クラブ・ホテル・アネックス」(Club Hotel, Annexe 40 番)

1892 年

この年度における新しいホテルとしては次に述べる二軒があるが、いずれもホテルとは名のみのものであった。

ホテルとは全く関係がないが、この年の 2 月に横浜居留地 72 番で煙草販売を商売としていたギリシャ人のフィリップ (A. Philippe) が、営業免許を持たずに紙巻煙草を製造し、これを秘かに日本各地の煙草屋に売っているのは煙草税則違反であるとして、日本人同業者によって告発された。この事件は居留地内で起こったことで治外法権であるとか、無条約国民の場合は日本において自由に営業することはできないなど、大いに舌戦が闘わされた。

この年の同じ2月、横浜の石川仲町であちこち安宿を泊まり歩きながら極貧の生活を送っていた松本某が松薪に火をつけ、燃え上がった頃に石油を全身に浴びて自殺を計かるという一件を起こし、横浜住民を驚かせている。

コスモポリタン・ホテル・アンド・レストラン

居留地187番は1874年（明治7）以降「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」が1892年までであった地番で、その長い間の変遷は1874年と1881年の項ですでに記述しておいた。

1892年（明治25）に入ると、136番で「コスモポリタン・ホテル」を営んでいたカーティスとキングのふたりが187番に移転すると「コスモポリタン・ホテル・アンド・レストラン」と改めた。187番のこのホテルは1894年中に閉業されたが、約1年の空白をおいて1895年（明治28）にシュワルツ（F. Schwarz）が支配人となって「メトロポリタン・ホテル」（Metropolitan Hotel）として再開された。しかし、これも翌年の1896年には閉鎖されてしまった。この地番に1899年に入って「スター・ホテル」（Star Hotel）が新たに極く短期間開業された形跡があるが、この経営者は知られていない。

ヨーロップ・ホテル

居留地81番は古くから簡易宿泊所、酒場、パン屋、食堂、ボーリング場などが、いつの時代にも軒を連ねていた地番だが、「ヨーロップ・ホテル」がハーリー（John Harry）によって経営されるようになった1892年（明治25）夏にも、ここには6軒ほどの酒場やサロンが店を開いていた。

ハーリーの「ヨーロップ・ホテル」は翌1893年には姿を消してしまうので、ホテルとは名のみ安宿でしかなかった。このようなホテルの場合は、経営者が換わるとバーになったり食堂になったりするので、その変遷は実につかみどころがない。

81 番のホテルがあった 1892・1893 年代、波止場に近い 41 番の一角にも同名の「ヨーロッパ・ホテル」が開業しており、また 1895 年には 149 番に新しい同名のホテルがオープンされていたりする。

1892 年に横浜にあったホテル

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 18-20 番)

「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」(Hôtel et Café de l'Univers 187 番)

「コンコルディア・ホテル」(Concordia Hotel 179 番 C)

「クラブ・ホテル」(Club Hotel 5 番)

「ヨーロッパ・ホテル」(Europe Hotel 41 番, 81 番)

「コスモポリタン・ホテル」(Cosmopolitan Hotel 136 番)

「ファルコン・ホテル」(Falcon Hotel 97 番)

「オテル・デュ・コメルス」(Hôtel du Commerce 133 番)

「インターナショナル・ホテル・アンド・ベーカリー」(International Hotel & Bakery 188 番)

「オリエンタル・ホテル・エ・レストラン・フランセ」(Oriental Hotel et Restaurant Français 87 番 A)

「クラブ・ホテル・アネックス」(Club Hotel, Annexe 40 番)

「コスモポリタン・ホテル・アンド・レストラン」(Cosmopolitan Hotel & Restaurant 187 番)

1893 年

この年度にオープンされたホテルとしては「ライト・ホテル」が本格的なものとして注目されるが、新たに開業される「クラレンドン・ハウス」の方は、一応月極めによるプライベートなホテルとして出発した。

一方、「クラブ・ホテル・アネックス」は 1893 年 3 月 8 日に火災を起こ

して消滅し、新しく支配人となったピーブルズが焼死するという悲しい事故がこの年に起きている。

ライト・ホテル

居留地40番もホテルの変遷はかなり目まぐるしい地番だが、1891年（明治24）に5番の「クラブ・ホテル」の別館である「クラブ・ホテル・アネックス」がライト（**Henry Nichol Wright**）を支配人として開業された。ライトはイギリス領事館の保安係として勤務していた男であったから、ホテル経営に関しては素人だったわけだが、1893年初めに「クラブ・ホテル・アネックス」の隣りに「ライト・ホテル」（**Wright's Hotel**）を建て、その持ち主・経営者となり、「クラブ・ホテル・アネックス」の支配人の職をおりた。年度毎に「ディレクトリー」で40番のホテルを追ってみると、1893年に「クラブ・ホテル・アネックス」がなくなり、「ライト・ホテル」へ名称変更がなされたように読みとれるが、実際には1893年初めに40番には両ホテルが存在していた。しかし、「アネックス」の方はこの年の3月に焼上してしまったため、以降この地番のホテルは「ライト・ホテル」だけが存続したのであった。

「アネックス」から火災が発生した時、「ライト・ホテル」の方はなんら損害はなかったものらしく、火災時の記録ではこのホテルの被害は伝えていない。四階建ての「ライト・ホテル」の規模は不明だが、ポール・サルダーの設計したもので、木骨石造りの本格的なものであった。残された写真によると、中央玄関上に「**WRIGHT'S HOTEL**」の看板が掲げられ、二・三階部分は煉瓦造りになっていて、客室は少なくとも50室はあったようにみなされる。

「ライト・ホテル」は1916年（大正5）まで20年以上にも渡ってここにあってだけに、横浜ではもちろん、多くの旅行者に親しまれたホテルであった。ライトがこのホテルから手を引いたあと、名前を「イースタン・

ホテル」と改称し中国人によって経営されていった。

クラレンドン・ハウス (ホテル)

1891年(明治24)から1893年にかけて横浜山手222番に、スタニランド夫人(Mrs. F. Staniland)が経営する下宿があったが、1893年に山手から居留地26番に移転すると、ここに「クラレンドン・ハウス」(Clarendon House)を開いた。

山手にもいくつもの下宿屋があり、その大半が宣教師らの宿泊に便宜をはかっていたものであったから、宣教師夫人と思われる彼女も、最初はそのような人のために下宿を開いたものであろう。

居留地26番の「クラレンドン・ハウス」も開店当初は、だれもが自由に泊まれるホテルではなく、ある一定の期間を限って契約して泊まる形式の閉ざされたプライベートなホテルであった。1893年に開かれたこのハウスはすぐに「クラレンドン・ホテル」と呼称されるようになったが、原則としては月極めによる部屋の提供という形がとられた。

1897年(明治30)に入ると、「クラレンドン・ホテル」はなくなり、26番一帯は整地され直されて、ここに新しい「オテル・ド・ジュネーブ」という横浜では一流ともいえるホテルが開業された。したがって、「クラレンドン・ホテル」の名前は、約4年間その名を留めたにすぎなかった。

1893年に横浜にあったホテル

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 18-20番)

「コンコルディア・ホテル」(Concordia Hotel 179番C)

「クラブ・ホテル」(Club Hotel 5番)

「ヨーロッパ・ホテル」(Europe Hotel 41番, 81番)

「ファルコン・ホテル」(Falcon Hotel 97番)

「オテル・デュ・コメルス」(Hôtel du Commerce 133番)

「インターナショナル・ホテル・アンド・ベーカリー」(International Hotel & Bakery 188 番)

「オリエンタル・ホテル・エ・レストラン・フランセ」(Oriental Hotel et Restaurant Français 87 番 A)

「クラブ・ホテル・アネックス」(Club Hotel, Annexe 40 番)

「コスモポリタン・ホテル・アンド・レストラン」(Cosmopolitan Hotel & Restaurant 187 番)

「ライト・ホテル」(Wright's Hotel 40 番)

「クラレンドン・ハウス」(Clarendon House 26 番)

1894 年

この年度、「クリテリオン・ホテル」と「セントラル・ホテル」が開業されたが、いずれも名称変更されただけで、新規オープンのホテルはなかった。1890 年以降の居留地内のホテルは 12・13 軒で、ほぼ定着した数である。

日清戦争の影響によって、「凱旋煙草」や「無敵煙草」が売りだされたかと思うと、「大勝利」といった石鹼、「凱旋煮」という食物なども現われ、勝利に酔った日本だが、さすがにホテル名では勝利ホテルなどは開業していない。

この年、横浜居留地の中国人の数は 3,500 人ほどを数えたが、戦争により続々と帰国して一時 1,000 名ほどに減った。この際に自分の家屋・家財に保険を掛け、自ら放火し保険金を貪ぼうとする者が続出したため居留地内に住む者は安眠できず、夜警団を編成し警戒にあたった。103 番の裁縫店・陳芝卿を始め、多くの家屋がこの時期に放火され大きな混乱をきたした。

クリテリオン・ホテル

1894 年(明治 27)に、97 番の「ファルコン・ホテル」がハウスタインよりプラット(S. E. Pratt)に譲歩されたため、プラットはこれを「クリ

テリオン・ホテル」(**Criterion Hotel**)と改称した。

「クリテリオン・ホテル」は1918年まで長い間この地番にあったが、プラットの経営は1904年まで続き、その後はヒーネイ(**G. F. Heeney**)によって1918年の閉業まで彼の経営は続いた。97番の地番については再三に渡って述べたが、1903年(明治36)にはここに「ブリタニア・ホテル」(**Britannia Hotel**)、「ナヴァル・ホテル」(**Naval Hotel**)、「ノード・ホテル」(**Nord Hotel**)などがあった。しかし、「クリテリオン・ホテル」以外は、いずれも短期間で閉業している。

約25年にも渡って「クリテリオン・ホテル」が営業を続けていただけに、料金が安いとか雰囲気が良いといった長所があったはずだが、これらについての記録はみあたらない。

セントラル・ホテル

1893年(明治26)に179番の「コンコルディア・ホテル」が閉業したが、翌年アルノー夫人(**Mme. M. Arnaud**)がこの地番で「セントラル・ホテル」(**Central Hotel**)をオープンした。

このホテルは1904年までの約10年間この地番にあったが、1899年よりドゥートルランジュ夫人(**Mme. Françoise Doutrelingue**)やヴェリセル(**L. Verissel**)に代替わりをしているところから2年契約で賃貸しされた様子である。その後、この場所で「オテル・ド・パリ」(**Hôtel de Paris**)と名称を改めコット(**L. Cotte**)が経営していくようになるが、彼は「オリエンタル・パレス・ホテル」に関わりを持つ人物であった。

「ジャーマン・ホテル」がオープンされてから、179番のホテルは「コンコルディア・ホテル」、「セントラル・ホテル」、「オテル・ド・パリ」と名称を換え延べ30年近くも営業が続けられていったが、それだけこの地番は大棧橋から近いという地の利があった。

ドゥートルランジュ夫人の出した広告では、¹³³イギリス波止場から2ブ

ロックと地の利を宣伝しており、長期滞在者には特別料金を適応としている。一流クラスのホテルとも謳っているが、ビリヤード・ルームとバーが併設されていることを伝えているだけで、ホテルの規模等の記録はこの広告にはない。

1894 年に横浜にあったホテル

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 18-20 番)

「クラブ・ホテル」(Club Hotel 5 番)

「ヨーロッパ・ホテル」(Europe Hotel 41 番)

「ファルコン・ホテル」(Falcon Hotel 97 番)

「オテル・デュ・コメルス」(Hôtel du Commerce 133 番)

「インターナショナル・ホテル・アンド・ベーカリー」(International Hotel & Bakery 188 番)

「オリエンタル・ホテル」(Oriental Hotel 87・88 番)

「コスモポリタン・ホテル・アンド・レストラン」(Cosmopolitan Hotel & Restaurant 187 番)

「ライト・ホテル」(Wright's Hotel 40 番)

「クラレンドン・ハウス」(Clarendon House 26 番)

「クリテリオン・ホテル」(Criterion Hotel 97 番)

「セントラル・ホテル」(Central Hotel 179 番)

1895 年

この年度、居留地 187 番に「メトロポリタン・ホテル」がシュワルツによって名称を換えて開業されたが、1 年ほどで閉業された。この E. シュワルツだが、この年度に開かれる「スタッグ・ホテル」の F. シュワルツと同一人物の可能性がある。

前年の暮れに、大手の「オリエンタル・ホテル」が火災に遇い、87 番の

店を閉じた。

クローセنز・ホテル

日本郵船会社で働き、後に横浜居留地内で船舶やボートの製作をしていたクローセン (C. B. Clausen) は、1895 年 (明治 28) に 66 番に「クローセنز・ホテル」(Clausen's Hotel) を開いた。

居留地 66 番は 400 坪を越す広い地所だが、「クローセنز・ホテル」がオープンされた時、この地番にはいくつかの商社や個人の家屋が数軒あったので、個人住宅を買いとって改修をしたものだったと思われる。クローセン自身は前田橋に近い運河沿いで船大工の仕事を続け、ホテルの方は夫人にまかせきりだっただけに、少なくとも開業当初は下宿といった性格のものであったろう。

船大工からスタートしたクローセンは、明治 30 年代に入って家屋を専ら建てる大工職に代っていたが、ホテルの方は 1905 年まで 10 年間ここで営業が続けられ、日本人の番頭が雇われたりしていた。

居留地 149 番のホテル

本村通りの 149 番は、1895 年から 1898 年かけて簡易宿泊所、サロン、酒場など常に八軒から十軒の店があったが、これらの中にホテルと称した安宿がいくつかあった。

「レジデンタル・ホテル」(Residential Hotel) は、1895 年後半から 1896 年にかけてテルケルトバ (J. Terkeltoba) が開いたホテルであった。

「ヨーロッパ・ホテル」(Europe Hotel) も 1895 年に開店されたホテルだが、このホテルは 1899 年までの 4 年間ベルンスタイン (S. Bernstein) が経営した。

「コロンビヤ・ホテル」(Columbia Hotel) と「ブリタニヤ・ホテル」(Britannia Hotel) も 1897 年 (明治 30) から翌年にかけての極く短期間こ

の地番にあり、前者はアナストプュロ（**H. Anastopulo**）が、後者はニアリー（**John Neary**）が経営者であったが、いずれもホテルとは名のみの簡易宿泊所でしかなかった。

ヨーロッパ・ホテルは横浜ばかりでなく、他の国でもよくみられる極めて一般的な名称だが、居留地内のヨーロッパ・ホテルにつき簡単にまとめておこう。

- ①「オテル・ド・リョーロップ」1864年開業 居留地 97 番。
- ②「ヨーロップ・ホテル」1880年開業 居留地 133 番。
- ③「ヨーロップ・ホテル」1886年開業 居留地 41 番。
- ④「ヨーロップ・ホテル」1892年開業 居留地 81 番。
- ⑤「ヨーロップ・ホテル」1895年開業 居留地 149 番。

これらの欧州ホテルについては、それぞれ当該年度の項で説明してあるが、居留地制度がなくなった1899年以降にも同じ名前のホテルがさらにオープンされている。これらの小さなホテルは、大きなホテルとは違って混乱しがちなだけに、開業年に注意しなければならない。

スタッグ・ホテル

1895年（明治28）の後半から1896年にかけての1年間たらずの期間、シュワルツ（**Edward Swartz**）が「スタッグ・ホテル」（**Stag Hotel**）を開いていた。そこは居留地134番で、明治初年にはフランス人がパンの製造をし、明治8年（1875）より明治13年（1880）まで在横浜フランス郵便局が日本の駅通寮〔局〕の困惑をよそに堂々と郵便業務を実施していた場所だっただけに、おもしろい話題にはこと欠かないが、「スタッグ・ホテル」そのものに関する記録は全くない。

長いことフランス郵便局長・デグロン（**Henri Degron**）の住いであり局舎でもあった134番の家屋は木造二階建てであったが、1881年4月に彼が帰国した後すぐにここにボナフー（**Marius Bonafoux**）が「オテル・ペイ

ル・フレール」のコックを辞めて「カフェ・プロヴァンサル」(Café Provençal) なるレストラン兼宿屋を開いた地番でもある。¹³⁴⁾

メトロポリタン・ホテル

居留地187番の「コスモポリタン・ホテル・アンド・レストラン」が1894年(明治27)に店を閉めたが、翌1895年になってシュワルツ(F. Schwarz)が「メトロポリタン・ホテル」(Metropolitan Hotel)と改めてオープンした。しかし、「メトロポリタン・ホテル」は翌年には閉業され、「パシフィック・イン」と名称が換えられたらしいので、その開業期間はわずかに1年ほどでしかなかった。

ところで、1898年(明治31)6月に「クラブ・ホテル」の年次株主総会が開かれたが、その報告の中に「ホテル・メトロポール(Hotel Metropole)の売り立てが実施され、所有権は1898年3月31日に買い主に移管した」とある。¹³⁵⁾ このホテルの地番、新しい所有者など具体的な事柄はなにひとつ記録されていないが、これは「クラブ・ホテル」の東京店として築地1番にオープンされたホテルで、名称は似ているが「メトロポリタン・ホテル」とは関係ない。

1895年に横浜にあったホテル

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 18-20番)

「クラブ・ホテル」(Club Hotel 5番)

「ヨーロッパ・ホテル」(Europe Hotel, 41番, 149番)

「オテル・デュ・コメルス」(Hôtel du Commerce 133番)

「インターナショナル・ホテル・アンド・ベーカリー」(International Hotel & Bakery 188番)

「ライト・ホテル」(Wright's Hotel 40番)

「クラレンドン・ホテル」(Clarendon Hotel 26番)

「クリテリオン・ハウス」(Criterion House 97 番)

「セントラル・ホテル」(Central Hotel 179 番)

「クローセンズ・ホテル」(Clausen's Hotel 66 番)

「レジデンタル・ホテル」(Residential Hotel 149 番)

「スタッグ・ホテル」(Stag Hotel 134 番)

「メトロポリタン・ホテル」(Metropolitan Hotel 187 番)

1896 年

この年度中に187番の「メトロポリタン・ホテル」は閉鎖されたが、代って「ウエレイズ・ホテル」が開業されるようになるので、居留地のホテルの数は前年と同数の14軒であった。

この頃のホテルの一泊料金は3円から5円で、食事込みの料金だったが、部屋代と食事代を切り離して宿泊料を支払う西洋流のやり方とは違ったため、日本で安くあげるのは難しいと旅行者は嘆くのが多かった。

ウエレイズ・ホテル

居留地42番は50番と背中合わせの200坪ほどの地所だが、ここには聖書教会や両替屋などの小さな店舗があった。1895年(明治28)にこの一角にウエレイ(W. A. Whaley)が住んだが、彼は自分の住いを利用して「ウエレイズ・ホテル」(Whaley's Hotel)を開業した。しかし、1896年中には閉業に追いやられてしまったので、短期間その名称を残したにすぎない。この店閉まいは、1896年6月のホテルでのボヤ騒ぎにあった。

コスモポリタン・ホテル (136 番)

居留地136番のホテルの流れは、1889年の「カナディアン・ホテル」の項で記述しておいたが、136番の「コスモポリタン・ホテル」が、1892年に他所に移転したあと約4年の空白をおいて、ブラウン(Joseph Brown)が

この地番にまた同じ名前のホテルを開業した。

ブラウンの経営する「コスモポリタン・ホテル」は、1896年後半より2年間存在していただけであった。

「コスモポリタン・ホテル」の名前があちこちにでてきたので、混乱を避けるために重複する個所もあるが、ここにまとめておく。

- ①「コスモポリタン・ホテル」40番 1888年
- ②「コスモポリタン・ホテル」136番 1890～1892年
- ③「コスモポリタン・ホテル・アンド・レストラン」187番 1892～1894年
- ④「コスモポリタン・ホテル」136番 1896～1898年

1896年に横浜にあったホテル

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 18-20番)

「クラブ・ホテル」(Club Hotel 5番)

「ヨーロッパ・ホテル」(Europe Hotel 149番)

「オテル・デュ・コメルス」(Hôtel du Commerce 133番)

「インターナショナル・ホテル・アンド・ベーカリー」(International Hotel & Bakery 188番)

「ライト・ホテル」(Wright's Hotel 40番)

「クラレンドン・ホテル」(Clarendon Hotel 26番)

「クリテリオン・ホテル」(Criterion Hotel 97番)

「セントラル・ホテル」(Central Hotel 179番)

「クローセンズ・ホテル」(Clausen's Hotel 66番)

「レジデンタル・ホテル」(Residential Hotel 149番)

「スタッグ・ホテル」(Stag Hotel 134番)

「メトロポリタン・ホテル」(Metropolitan Hotel 187番)

「ウエレイズ・ホテル」(Whaley's Hotel 42番)

「コスモポリタン・ホテル」(Cosmopolitan Hotel 136 番)

1897 年

居留地 149 番に「コロンビヤ・ホテル」と「ブリタニヤ・ホテル」の二軒が新たに登場するが、翌年にはもう閉業されているのでホテルとはいえ名のみのものであった。

この頃、187 番にパシフィック・ホテルがあったとする記録があるが、「ディレクトリー」などでは確認できない。同じような名称としては、「パシフィック・ハウス」は 162 番に存在していた。

ブリタニヤ・ホテル

コロンビヤ・ホテル

居留地 149 番のホテルに関しては、1895 年の項ですでに記述したが、「ブリタニヤ・ホテル」と「コロンビヤ・ホテル」は 1897 年後半から 1898 年にかけてここに開業されたホテルで、いずれかが「レジデンタル・ホテル」の流れを汲んだものと考えられる。なお、この時期「ヨーロッパ・ホテル」もこの地番にあった。

これらの小さなホテルは年度毎のディレクトリーにみられるだけで、しかも短期間の開業だったことからほとんど追跡することができない。

1897 年に横浜にあったホテル

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 18-20 番)

「クラブ・ホテル」(Club Hotel 5 番)

「ヨーロッパ・ホテル」(Europe Hotel 149 番)

「オテル・デュ・コメルス」(Hôtel du Commerce 133 番)

「インターナショナル・ホテル」(International Hotel 188 番)

「ライト・ホテル」(Wright's Hotel 40 番)

「クラレンドン・ホテル」(Clarendon Hotel 26 番)

「クリテリオン・ホテル」(Criterion Hotel 97 番)

「セントラル・ホテル」(Central Hotel 179 番)

「クローセンズ・ホテル」(Clausen's Hotel 66 番)

「コスモポリタン・ホテル」(Cosmopolitan Hotel 136 番)

「ブリタニヤ・ホテル」(Britannia Hotel 149 番)

「コロンビヤ・ホテル」(Columbia Hotel 149 番)

1898 年

この年度、規模の上では「グランド・ホテル」に次ぐ美しい「オリエンタル・ホテル」が海岸通りにオープンされたが、このホテルは再三に渡って火災に見舞われるまさに悲劇的なホテルであった。

「クラブ・ホテル」の裏手に当たる居留地26番に、「オテル・ド・ジュネーブ」がこの年に新しく開業された。

オリエンタル・ホテル (11 番)

居留地87番にあった「オリエンタル・ホテル」を1894年11月に火災で失ったレオン・ミュラーは、1898年(明治31)4月30日海岸通り11番に約2年半をかけて完成させた新しい「オリエンタル・ホテル」をオープンした。¹³⁶⁾

居留地にあって最も美しい建物といわれたこの新しいホテルは石造り二階建て、外壁を赤煉瓦と漆喰塗り仕上げ、イタリア・ルネッサンス様式の外観を有するものであった。海岸通りに面した中央玄関側には、天井に檜を張りつめた意匠を凝らした食堂が置かれ、広々としたバーなどは採光をステンドグラスを通して取り入れるなどかなり贅をつくしたもので、寝室の多くの内装もイタリア・ルネッサンスの意匠で飾られ、利用者がきちんと調整できる暖房装置も備え付けられているという近代的な便利さを

有するものであった。開業当初の部屋数は40室であったが、経営が軌道にのればすぐにでも増築する意図をミュラールは持っていた。

東洋一の料理人との評判を欲しいままにしていたレオン・ミュラールは、実務面に非凡な能力をみせるベルギー生まれのデュウェット (L. Dewette) を共同経営者として選び、ふたりによる共同経営が続けられることになったが、ホテルの開業前から成功疑いなしとの巷の噂が立つほどであった。

事実、雰囲気の良い落ち着いた寝室、ゆったりとしたふたつのロビー、美しいタイルを敷きつめたホール、美味しい食事とあつては旅行者に歓迎されないはずもなく、経営は順調な伸びを示していった。

これにすっかり気をよくしたミュラールは、1900年（明治33）に入ると15万円もの費用をかけて増・改築をし、翌1901年の夏にはこの工事が完成をみた。この時、ホテルの規模は間口14間に奥行き34間の広大なホテルとなっていたが、この11番は498坪の地所であったから、ほぼこの敷地全体に建設されたことになる。

好事魔が多いというが、やっと修繕がかなったばかりの1901年に、隣りの家よりもらい火を受けてホテルは全焼してしまった。¹³⁷⁾ 1901年11月17日の午前1時を少し回った頃、山下町海岸通り12番の中国人の洋服店・鐘松甫方より出火し、たちまちの内にこの家屋を焼き尽した。細い小路を挟んで立っていたオリエンタル・ホテルは、最初の内こそ煉瓦壁に護られ延焼を免れていたが、かなり強い北風にあおられた火の手は、ホテル外壁に沿って伸び、屋根部分や軒を焦がし始めた。あっという間に最上階は炎に包まれ、ホテル内部には煙が渦巻いた。ここに寝ていた持ち主のミュラールは、火災発生直後に女中の天野ナカ（47歳）に起こされ難を逃がれることができた。深夜の火災にもかかわらず、宿泊者には幸い死傷者はでなかったものの、お客を誘導していた天野ナカだけが燃え落ちてきた建材の下敷きになって焼死するという不幸な結果になった。ホテルは約25万円もの損害をだしたが、この額の大半は保険で補填された。

横浜の華ともいわれた瀟洒な「オリエンタル・ホテル」を火災で失ったミュラールは、これに挫けることもなくホテルの再建に乗りだした。ホテル新築を依頼して一時フランスに帰国していたミュラールは、1903年4月に横浜に戻ると海岸通りで建築中のホテルを眺め安堵するのであった。

1903年（明治36）10月6日盛大に開業式がとり行なわれたホテルは「オリエンタル・パレス・ホテル」と称し、¹³⁸経営も同様にミュラールとデュウェットとの共同であったが、この時からミュラールの甥・ジャン（Jean Muraour）が会計係として参加した。

オリエンタル・パレス・ホテル

1903年10月に新築になったホテルは、セメント・モルタル造りに赤煉瓦を組み込ませ、白と灰色の石で枠組みをとったがっちりとした三階建てのものであった。一階に60人が収容できる食堂、ビリヤード室、バーなどを配し、二・三階部分に64室の寝室を有し、地震の際に事故が起きないように窓ガラスにはワイヤ入りのものが使われるなど、細心の注意がほどこされたホテルであった。

海岸通り11番に建つこのホテルは、同じ並びの「グランド・ホテル」ほどではないにしろかなりの賑をみせ、客あしらいの上手な洗練された料理をだすホテルとして好評を博した。明治36年に建てられた最も近代的な機能を備えたホテルとはいっても、バス付きの寝室は全体の部屋数の3分の1に当たる20室ほどであったから、あとは推して知るべしで、現在のホテルとは到底比較できるものではない。

「オリエンタル・パレス・ホテル」も先の「オリエンタル・ホテル」と同じ様に、ドイツ人のゼール（Richard Seel）の設計になった。ゼールは日本政府に招かれて来日した建築家で東京裁判所などの設計をしたが、その後横浜に居留し露清銀行の建築に携わったりしていた。なお、この「オリエンタル・パレス・ホテル」がゼールの最後の作品で、彼は1903年暮れベ

ルリンへ帰っていった。

1907年12月7日、ホテルを切り回していた共同経営者のデュウェットが61歳で逝去したため、実務面で大きな支障をきたすことになったミュラールは、カンヌで「オテル・リュニヴェール」(Hôtel l'Univers)を経営していた弟のポーランに救いを求めた。

弟のポーラン・ミュラールは兄の依頼を受け入れ、カンヌのホテルを処分するとかって永年住んだ懐かしい日本へとやってきた。これ以降、ホテル経営はレオン・ミュラール夫妻の他に、ポーラン・ミュラール夫妻と数名の甥たちで続けられることとなり、文字通りミュラール一族で固められたのであった。

新しい顔ぶれによるホテル経営は長くは続かなかった。またしても、ホテルはもらい火を受けて崩壊する羽目になったからである。

1909年(明治42)12月18日の午後7時30分頃に、山下町13番地のオープンナーメル商会(Oppenheimer & Co.)が所有する小さな家屋から出た火は、すぐ隣り合っていた12番の木造・ペンキ塗りの梁部(新聞記事によっては山部)写真館をたちまちにして焼き尽し、9時頃には12, 13番の商社や倉庫を完全に灰にしてしまった。¹³⁹⁾

この頃にホテルに付随する倉庫が炎に包まれ、そのすぐ側のホテルも火が付くのは時間の問題だと思われた。しかし、このホテルそのものは厚い煉瓦壁と防火扉に守られ、さらにこの大きな建物に火が付いてはもはや手のくたしもうがなくなるとあって、必死の消火作業が続けられ、なんとか炎上を免れていた。

いつとき、ホテルの屋上部分に火が付いたが、幸い放水が充分であったためすぐに消し止められ、ホテルそのものはなんとか延焼は免れ、火勢はそのまま鎮まるものと考えられた。しかし、3時間にも渡っての火勢によりすっかり温められていた壁面は、手ではとても触れられないほどになっていて、この高熱が内部を焦がし、窓枠などからも煙がでてきたためホテ

ル内は想像を絶する騒乱の場となった。午後10時30分、ひとつの家屋としては横浜で最も大きく、東洋で最も人気のあった「オリエンタル・パレス・ホテル」はなんとか焼上を免れることができ、山下町は大火事から救われた。

「オリエンタル・ホテル」以来、再三に渡って自分のホテルを失ったレオン・ミュラールではあったが、気を改めてホテル再建に立ち上がった。しかし、前年に最愛の妻を失い、さらに過去40年にも渡って料理人の腕を振り、「グランド・ホテル」などの持ち主となったポーラン・ミュラール夫妻も、「オリエンタル・パレス・ホテル」火災騒ぎのあとフランスに帰国したこともあって、ホテル経営にかなり消極的な姿勢をみせるようになっていった。

弟ポーランが1912年7月にカンヌで逝去した知らせを受けたあと、その心労などから健康を害した兄レオンはフランスでの転地療養を強いられ、1913年（大正2）6月7日にフランス郵船のポール・ルカ号（**Paul Lecat**）に乗船し横浜を発った。彼は7月16日にマルセイユに到着したが、すぐその足でカンヌへと向かった。しかし、長途の旅の疲れが病身の彼に重くのしかかり、カンヌに着くとそのまま床につき、この年の7月28日にここで息を引きとった。¹¹⁰⁾68歳であった。ポーランが前年の7月15日に亡くなっているの、その1年後ということになるが、これもなにかの奇縁でもあったのだろう。

レオンが去ったあとの「オリエンタル・パレス・ホテル」は甥のジャンにまかせられ、明治40年代に入ってから山下町179番の「オテル・ド・パリ」（**Hôtel de Paris**）を経営していたコット（**L. Cotte**）が経営参加をするようになったが、このホテルも大震災で廃虚と化してしまった。

オテル・ド・ジュネーブ

居留地26番には1892年（明治25）以降1897年まで月極めで宿泊させる

ホテル「クラレンドン・ハウス」(Clarendon House)があり、その経営者はスタニランド (F. Staniland) 夫妻であった。夫のスタニランドはホテルに手をだす前は船舶関係の代理業をする傍ら、夫人の方は山手222番で下宿業に専念していた。

この「クラレンドン・ハウス」のあった地番が整地され、フランス人・サルダー (Paul Sarda) の建築になる「オテル・ド・ジュネーブ」(Hôtel de Genève) が1898年(明治31)に新規開業された。

建築家・サルダーについては、すでに本稿などでもその経歴を記述したので重複を避けるが、「ライト・ホテル」と同じ設計者によるホテルだっただけに、これらふたつのホテル実によく似た外観を持っていて、屋根裏部屋まで含めて四階建て、木骨石造りなど同じ工法がとられている。

「オテル・ド・ジュネーブ」は1911年(明治44)まで一貫してフランス人・ジュール・デュボア (Jules Dubois) により経営が続けられたが、横浜居留地では「グランド・ホテル」、「クラブ・ホテル」、「ライト・ホテル」と共に代表的なホテルであった。とはいっても、部屋数はせいぜい30室ほどの中堅ホテルであり、「グランド・ホテル」とはとても比較できないが、水町通りの落ち着いたホテルとして固定客が多かったようである。

1898年に横浜にあったホテル

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 18-20番)

「クラブ・ホテル」(Club Hotel 5番)

「ヨーロッパ・ホテル」(Europe Hotel 149番)

「オテル・デュ・コメルス」(Hôtel du Commerce 133番)

「インターナショナル・ホテル」(International Hotel 188番)

「ライト・ホテル」(Wright's Hotel 40番)

「クリテリオン・ホテル」(Criterion Hotel 97番)

「クローセンズ・ホテル」(Clausen's Hotel 66番)

「コスモポリタン・ホテル」(Cosmopolitan Hotel 136 番)

「ブリタニア・ホテル」(Britannia Hotel 149 番)

「コロンビア・ホテル」(Columbia Hotel 149 番)

「オリエンタル・ホテル」(Oriental Hotel 11 番)

「オテル・ド・ジュネーブ」(Hôtel de Genève 26 番)

1899 年

新しいホテル名としては、居留地 187 番に「スター・ホテル」が登場する。これはかつてこの地番にあった「メトロポリタン・ホテル」の建物を利用したものと考えられるが、経営者ともどもはっきりしなく、極く短期間で閉ざされてしまった。

1890 年(明治 23)以降の大手のホテルとしては、この年に新館がオープンされる「グランド・ホテル」、1893 年の「ライト・ホテル」、火災後の 1897 年に居留地 11 番に新築された「オリエンタル・ホテル」、それと 1898 年に新規開業された「オテル・ド・ジュネーブ」があったが、この四軒のホテルに「クラブ・ホテル」を加えた五つのホテルが 1900 年(明治 33)以降も横浜を代表するホテルであった。ベッド数は合計して 550 から 600 程度のものだったから、この程度の数で旅行者の需要は満たしていたものとみえる。

1910 年(明治 43)代に入っても、横浜での洋式ホテルは大小あわせて平均 14・15 軒であり、1880 年(明治 13)代と較べても大きな差はない。これに対し、1910 年代に日本式旅館は横浜で 200 軒近くも営業していた。

1899 年(明治 32) 7 月 17 日条約改正により居留地制度は撤去されることになった。この時期ともなると、居留地にも多くの日本商社が進出し日本人街との区別もほとんどなくなっていただけに、居留地撤去に対する特別な行事も、提灯行列もなく、いつもと変わらぬ横浜であった。これにより居留地一帯は山下町と呼ばれるようになったが、地番の変更はほとんど

なかった。つまり、居留地 20 番の「グランド・ホテル」は山下町の 20 番、居留地 40 番の「ライト・ホテル」は山下町の 40 番となったわけで、現在の山下町 60 番地は旧居留地 60 番と読み変えて大きく誤ることはない。ただし、地番によっては旧居留地と山下町とでは番地に相違がみられる場所もなくはない。

187 番のホテル

この地番のホテルについては 1874 年、1881 年、1892 年と 1895 年の個所で触れておいたが、1889 年からはホテルとは別に「コマーシャル・イン」があり、さらに「メトロポリタン・ホテル」の跡を継いだと判断される「パシフィック・イン」(**Pacific Inn**) がカーマン (**J. Kerman**) により経営され、これらはホテルと呼称されることもあった。なお、1899 年に開かれた「スター・ホテル」は「コマーシャル・イン」の一時改称したものと考えられる。

1899 年に横浜にあったホテル

「グランド・ホテル」(**Grand Hotel** 18-20 番)

「クラブ・ホテル」(**Club Hotel** 5 番)

「ヨーロッパ・ホテル」(**Europe Hotel** 149 番)

「オテル・デュ・コメルス」(**Hôtel du Commerce** 133 番)

「インターナショナル・ホテル」(**International Hotel** 188 番)

「ライト・ホテル」(**Wright's Hotel** 40 番)

「クリテリオン・ホテル」(**Criterion Hotel** 97 番)

「クローセンズ・ホテル」(**Clausen's Hotel** 66 番)

「オリエンタル・ホテル」(**Oriental Hotel** 11 番)

「オテル・ド・ジュネーブ」(**Hôtel de Genève** 26 番)

「スター・ホテル」(**Star Hotel** 187 番)

山手地区のホテル

山手 (Bluff) 居留地のホテルはほとんど記録に現れてこないが、月極めによる下宿・宿泊所はかなりの数があった。山手居留地は山下町の居留地に較べると地代は遙かに安く、また閑静な場所でもあっただけに、ホテルより下宿向きの地域であった。

1863年(文久3)8月、フランスはイギリスより一足早く山手の駐兵権の獲得を目的として、アフリカ猟兵の小分遣隊を屯営させていたが、この年の9月にフランス人・カミュ (Henri Camus) 少尉が井土ヶ谷で殺害されたあと、外国人保護のためジョーレス堤督 (Constant Louis Jaures) はこの地を維持すると宣言し、居留地を見下ろす山手に三色旗を立てた。この後、イギリスも山手に軍隊を駐屯させたが、こういった軍人の乗馬や散策のために1864年に山手から南に延びる新道を開き、東海道での騒乱に巻き込まれることを回避しようとした。この新道はすぐに拡張され、その沿道沿いに休憩所が早くも立ち並んだ。1865年9月のワーグマンのポンチ画には、新道での賑いを示すものがあり、ここにコーヒー店が描かれている。

この新道の起(終)点となる地蔵坂を登りきったところの休憩所は、簡単な軽食に各種の飲み物がとれることから近くを散歩する人たちに重宝され、自然と「コーヒー・ハウス」とか「コーヒー・ハウス・ヒル」と呼ばれるようになった。ところが、名前とは逆にコーヒー以外の飲み物ならたいていの種類のものは揃っていたともいう。

この手の茶屋であれば、山手地区には1865年に開店されているが、ホテルと名のつくものは1880年まで開業されていない。このホテルは1880年7月20日にオープンされた「チボリ・ガーデンズ・ホテル・アンド・レストラン」(The Tivoli Gardens, Hotel & Restaurant)だが、これはまず「チボリ・ガーデンズ」と称し、山手68番に落ち着いて読書ができる喫茶店を目的にミッシェル (A. Michel) がこの年の5月中旬に開いたものであった。¹⁴¹⁾

この山手68番はかつてヘフト (**M. J. Brasserie Noordhoek Hegt**) がビールの醸造所を開き、さらにウィーガンド (**Emil Wiegand**) がバヴァリア・ブルワリーを興した有名な場所で、1,300坪もの広大な地所だったが、その一部をヘフトよりミッシェルが譲り受けて開業したのであった。

「チボリ・ガーデンズ」は喫茶店のかたわら軽食を提供するようになり、ついには月極めによる宿泊者のためのホテルへと営業を拡げていった。しかし、このホテルは一夏で閉業に追い込まれたものらしく、ミッシェルは再び洋酒輸入販売で生計を立てるようになった。

このホテルに継ぐものとしては、「スミス・ホテル」がある。これはW. スミス (**William Smith**) が山手240番で経営したものだが、1883年と1884年版の『ジャパン・ディレクトリー』にその名称が見られるだけで、どの程度の規模を有したのか、ホテルとは名のみで下宿屋だったのかといったことは一切不明である。

下宿の方は割に数多くあったが、ここでは後にホテル業を手懸けるようになる人物が経営した月極めの下宿を紹介しておこう。

山手2番に1890年(明治23)から翌91年にかけて住み、その後山手222番に居留した人にスタニランド (**F. Staniland**) がいた。彼はこれらの地番で下宿屋 (**Staniland Boarding House**) を開いていたが、1893年に入ると山下町26番で「クラレンドン・ハウス」(**Clarendon House**) という下宿に毛の生えた程度のホテルをオープンし、ここで4年間経営していた。

この山手2番には青少年向きの学校があり、ブリタン (**H. G. Brittan**) という女性が教師であったが、彼女は1892年(明治25)2月より下宿の経営を始めるようになった。¹⁴²⁾ 一日1.5ドルで12歳以下の子供はその半額であったが、専ら宣教師関係の人たちを宿泊させようとしていたので、おそらく彼女は尼僧だったのであろう。時期的な面から判断すると、この「ボーディング・ハウス」(**Boading House**) は先のスタニランドの下宿の後を継いだものとみなされる。なお、1902年(明治35)に入ると、この山手2番

には「ブラフ・ホテル」(**Bluff Hotel**)が開業された。

欧字新聞の広告を読んでいると、時としてホテルかと思わせる名称にぶつかる。¹⁴³⁾例えば、1876年(明治9)の新聞広告に「**Bay View House**」と一見ホテルとおぼしい名称が掲載されているので調べてみると、実は山手に開かれた仏・英語を教える学習所の寄宿舍だったりもする。

シェークスピア・イン (ホテル)

山手居留地からかなり離れたところに根岸競馬場があったが、この競馬場のすぐ近くに「シェークスピア・イン」(ホテル)があった。「シェークスピア・イン」はポーンスフォート(**George Pauncefort [e]**)の経営した旅館だが、彼が根岸に移転する前に戸塚ですでにこの名前の旅館を開いていたと書く回想記がある。本稿ですでに触れたように、戸塚にはカーティスの経営する「白馬亭」があったが、戸塚に「シェークスピア・イン」があったとする資料にはどうしてもぶつからない。後になって回想された話や回想記は誇張があったり、また年代のずれなどはざらで、いまひとつ全幅の信頼をおけない場合がよくある。ポーンスフォートが戸塚に住んだのは事実だが、彼がここで「シェークスピア・イン」を本当に開いたのか、それともカーティスの「白馬亭」(**White Horse Tavern**)の経営に加わったことがあるのか、「シェークスピア・イン」と「白馬亭」とは全く別の施設だったのかとなるともう解答がみいだせない。必ずしも十分にポーンスフォートの動向を探ったわけではないが、呼水となるよう彼の足跡を先に少し追いかけてみたい。

ポーンスフォートは1819年にイギリスのオックスフォードシャーに生まれ、若い頃はある専属劇団のメンバーとしてイギリス各地で巡行し、1860年代にアメリカに渡り主にカリフォルニアを中心に興行をうっては名を成していった。1870年代に入ると、彼は旅役者として世界各地を巡り、1873年(明治6)2月21日に香港を経由して横浜にやってきた。この時、約2

週間横浜に滞在して、3月11日の郵船でサン・フランシスコへ向かったの
で、居留地のどこかで朗読会を開いたものと思われる。

二度目に横浜にきたのはこの年の暮れのこと、この時は上海や長崎で
朗読会を催しながらの到着であった。ポーンスフォートは喜劇やミュージカ
ルの演出家・俳優でもあったが、翌1874年4月17日にゲーテ座でシェリ
ダンの「恋がたき」(**The Rivals**)の演出をしたのを皮切りに、なん度と
なくゲーテ座や禁酒会館で上演されたアマチュア劇団を指導したり、また自
らもたびたび「グランド・ホテル」で朗読会を開催しては居留者を楽しま
せている。

1875年(明治8)5月4日の東京・精養軒で開かれた朗読・音楽会では、
ポーンスフォートがディッケンズを読んで聴かせ、ワグナー (**Christian
Wagner**) がカスバートソン (**R. B. Cushbertson**) の伴奏により演奏した
が、かなりの評判を呼んだ。

ワグナーはドイツのカッセルに生まれ、幕末時には香港で音楽教師をし
ていたが、日本における音楽活動が皆無に近いのを知ると、1872年4月2
日に香港より日本に永住する覚悟で来日した。横浜に着くとそのまま山手
143番に住まい、音楽教師ワグナーの名をもって、「歌唱、フルート、ヴァ
イオリン、アコーディオン、ギターなどの教授、ピアノ・フォルテとオル
ガンの調律・修理を致します¹⁴⁴⁾」と広告した。

さらに、1872年5月には居留地に住む人たちに対し、演奏会を開くに
あたって、とにかくそれに関する会を設立しようではないかと呼びかけ、
関心のある人たちの連絡を求めたのであった。かくして、声と腕に自信の
ある者が集まり、練習の成果をゲーテ座などで発表するまでになったが、
素人演劇とは別に素人演奏会がワグナーによって育成されていったのは記
憶されてよい。

ワグナーの第一回目の演奏会は1872年12月11日のゲーテ座でであった
が、翌1873年1月22日の夜にここでマーシュ (**S. H. Marsh**) と共に開い

た演奏会では満員の観客を驚かす技の冴をみせ、横浜で聴いた最高の演奏会と激讃されたのであった。ワグナーは山手居留地220番にしばらく住み、1882年以降根岸で暮らしたが、1891年（明治24）1月10日ここで永眠し、外人墓地に埋葬された。72歳であった。

ポーンスフォートはワグナーと手を組んで精養軒で朗読・演奏会を開いたのが縁となり、1875年6月から7月にかけての1ヵ月上海へ赴き同様の催しを開いたりしていた。

1875年7月25日、ポーンスフォートはワグナーやピアノ調律師のカスバートソンと共に上海より横浜に戻ったが、その後1880年までの約5年間の足取りが明瞭でない。この間、戸塚に住んでなにをしていたものか、ホテル業に専念したのか不明だが、1875年代にカーティスが一時期ではあったが戸塚に住んで茶屋を開いていたことがあったので、このあたりに謎を解く鍵が隠されていそうである。

1880年に入り、ポーンスフォートは根岸競馬場に近い山手2,036番に移住すると、ここにその名もふさわしく「ホース・アンド・ジョッキー」(Horse and Jockey)なる旅館を開いた。ところで、カーティスの方だが居留地31番の「コマーシャル・ホテル」を処分し、1880年には戸塚に移り住んでいるところを見ると、ポーンスフォートの動向とかなり密接な関連があったものとみなされる。

カーティスが戸塚に開いたホテルは「白馬亭」(The White Horse Tavern, La White Horse Tavern)といい、その開業は1880年（明治13）4月15日のことであった。¹⁴⁵この年の4月から7月にかけてひんぱんに新聞に掲載された広告によれば、「白馬亭」は彼の所有になる旧ホテル「カーティス・ハウス」を再開したもののようである。ところで、この新聞広告では所有者が「Mme Matsakino-kami」として報じられているが、なぜこのような名前で広告したのかは不明である。

小田原・箱根で遊ぶ人たち、郊外でのピクニックを楽しむ人たちのため

に開かれた「白馬亭」の名称についてはこれまで諸説があるが、1880年以降でしか確認できない。

なお、カーティスのその後の足取りについては、1876年の「カーティス・ホテル」の項で簡単に纏めておいた。

ところで、戸塚の「シェークスピア・イン」だが、この名称のホテルは初めから戸塚にはなかったのではないかと思える。「ホワイト・ホース・ターヴァン」を「シェークスピア・イン」と誤って後に回想されたものと判断してよさそうである。さもないと、最も有効な宣伝となる新聞広告に「シェークスピア・イン」の名称が登場しないはずがない。

なお、1880年の暮れのクリスマスには居留地から大勢の人が「白馬亭」に集まって、射撃大会や鳩撃ち試合で楽しい時を過ごした。

根岸の新道に開店された「ホース・アンド・ジョッキー」は、この周囲を散策する人やたまに遠出をする家族連れに重宝されたが、1888年（明治21）に入ると「シェークスピア・イン」と改められ、ポーンスフォートがここで亡くなる1898年（明治31）まで続いていた。ポーンスフォートは居留地に住む多くのアマチュアに俳優術を教えたり、また振り付けをしたりしながら自らも舞台に立つことさえあった名物男であったから、総合病院で行なわれた告別式にはイギリス総領事をはじめ実に多彩な顔ぶれが列席し別れを惜しんだ。¹⁴⁶⁾

山手外人墓地の正面を入ってすぐ左手にポーンスフォートの碑があるが、この碑文には「1899年9月12日 横浜で没 80歳」と刻まれている。しかし、彼の逝去は1899年ではなく1898年9月12日の朝のことだったから、彫り誤ったのは明らかである。生年月日の月日の誤りは墓にはよくあるものだが、このような死亡年の間違いはあまり例がない。

ポーンスフォートが亡くなった後、「シェークスピア・イン」は「シェークスピア・ホテル」(Shakespeare Hotel)と改称され、未亡人と子供たちの手で場所も同じところで、関東大震災の起きた1913年まで経営されてい

た。

山手地区を描いた1905年頃の地図をみると、広々とした根岸競馬場の外側にいくつかの地番が示されていて、その2,036番の箇所に「**Shakespeare Hotel**」と明記されているものがある。

なお、根岸には「マチャド・ホテル」(**Machado Hotel**)があったとも記録されているが、これは1902年(明治35)にハーン夫人(**Mrs. E. Hahn**)が開いた「マカド・ホテル」(**Makado Hotel**)の誤りではないかと思われる。このホテルは通りの名から付けたもので、山手4,231番にあった。

横浜ユナイテッド・クラブ

石井研堂著の『明治事物起源』(昭和19年刊)に本邦最古のホテルとして「クラブ・ホテル」を掲げ、次のように記述している。

「横浜市海岸五番、クラブホテルは(一部略)、文久三年に、英人シメツツという者建築して、クラブとなし、慶応二年十月の横浜大火に、幸に類焼を免れたるが、明治二年に至りて、ホテルを兼ねたるため、クラブホテルと名づけたるものにて、ホテルとしては本邦最古のものなりし。」¹⁴⁷⁾

この記述を受けて、『横浜市史稿(風俗編)』(昭和48年刊)でもほぼ同じ記載がなされている。文久3年(1863)以前にもホテルのあったことは、すでに指摘されてきたことで、本稿でも記述しておいたが、このクラブは文久3年の段階では居留地5番には末だなかっただけに、基本文献であるこれらの二書の誤りは大きな誤解を与えたまま今日に至っている。

幕末期の記録をあれこれ調べてみると、「ユナイテッド・サービス・クラブ」、「横浜ユナイテッド・クラブ」、「クラブ・ハウス」といった名称が登場し、これらのクラブははたして同一のものだったのか、それとも複数のクラブがあったのかとまどうばかりであった。

さらに、これらのクラブのあった地番が明確でなく、パスケ・スミスが「横浜ユナイテッド・クラブ」は1863年に96番にまず設立されて、1865年に5番に移転したと書いたりもしていたため、この地番の決定にはかなり慎重な調査が強いられた。以下、これらのクラブの流れを記述しておくが、今後さらに新しい記録や資料の発掘が行なわれ、より正鵠をえたものになることを期待したい。

幕末、横浜居留地にはイギリス人を中心とするふたつのクラブがあり、ひとつは「ユナイテッド・サービス・クラブ」(United Service Club)といい、もうひとつは「横浜ユナイテッド・クラブ」(Yokohama United Club)と称した。これらふたつのクラブは1864年暮れに統合され一本化した。後に回想された手記などを集積してみると「横浜サービス・クラブ」などと記載されたり、単に「クラブ・ハウス」と書いた例さえあってかなりの混乱がみられる。これは年度毎の事蹟を調べる上で欠かすことのできない「ディレクトリー」として例外でない。

1862年8月25日、ソンダース(W. Saunders)という写真家が来港し、約3ヵ月ほど日本に滞在しては横浜居留地はもちろん、鎌倉、金沢(武蔵国)、江戸、神奈川や大阪の名所をカメラに納め、それらの写真を居留地51番の家屋を借り受けて展示・販売した。

幕末時、照相術、印影鏡、写真鏡などとも呼ばれた写真(器)は実に不思議なものだったらしく、文久3年刊の『横浜奇談』には「写真鏡という一種の奇物」として紹介され、大きな箱型のカメラの図が掲げられている。当時の写真器を知る上では貴重な図だが、ソンダースも同じようなカメラを持参してきたのだろう。それにしても、1862年に写真器を手にし、それで飯を喰って世界を漫遊した営業写真家・ソンダースの着眼の良さには驚ろく。

先に触れたベアトも横浜居留地で写真館を開いた草分けだったが、慶応3年(1867)12月の「万国新聞紙」には次のような広告が掲載されている。

「私儀写真鏡渡世仕候處、此度手前方之、蒙御免恭くも大君の御姿を奉写候、御望の御方は、私宅之御出可被下候、代金壹分貳朱。

横浜二十四番 ビワト」

「写真鏡渡世」という文字もおもしろいが、「大君」を撮影したという個所が注目される。大君とはもちろん徳川慶喜のことだが、慶喜は早くから写真術に注目し、亀谷徳次郎、吉竹永胤といった御用写真家を抱えていたほどの写真好きであったから、1867年4月の外国代表団との会見の際にベアトの撮影を赦したものとみえる。

時の大將軍・慶喜が紅毛人の洋服を着て、しかも外国人に写真を撮らせたということで、これは一大事とばかり閣老の間では大きな問題になったともいう。話しは横道にそれたが、ソンドースの写した数多くの写真の中に、山手から横浜居留地と日本人街の全景を撮った6枚組のものがあつた。

この6枚組の横浜全景について、1862年10月25日付けの「ジャパン・ヘラルド」紙はかなり詳しい解説を付けたが、その中に次の記述がなされている。

「2枚目のプレートには建築中の新しいイギリス教会が写しだされており、そのためなにやら複雑な足場がすでに組み立てられている。その後ろ手の2階建ての家屋は牧師館で、その隣が新しいクラブ・ハウスである。このプレートの左手ずうっと奥がカトリック教会の聖堂である。」

この記事では地番ははっきりしないが、建築中のイギリス聖公会教会が居留地105番で、牧師館が101番、さらにフランスのカトリック教会が80番であつたから、クラブ・ハウスの位置は83番から85番にかけての地番のいずれかということになる。この地番の決定は、これらの場所にどのような建物があつたのかを調べ、さらに消去していくことで解明されるが、こ

の点についてはもう少し先のところで触れることにする。

残された写真を見ると、83番附近にかなり大きな瓦ぶきの二階家がみえるだけに、この建物が多分そのクラブ・ハウスだったろうとの見当が付けられる。

ソンダースに遅れること約半月の1862年9月8日に来日したアーネスト・サトウも、この頃に主にイギリス商人からなる「横浜クラブ」があったことを書き留め、さらにあるイギリスの外交官が横浜居留地のことを「ヨーロッパの掃き溜め」と口にしたため反感をかい、1865年になるまでイギリスの公使館員や領事館員はだれひとりとして、このクラブには出入りが赦されなかったと書いている。

ソンダースの写真について説明した記事中に「クラブ・ハウス」とある建物と、サトウが「横浜クラブ」と称した建物とは同じもので、一般的には「横浜ユナイテッド・クラブ」(Yokohama United Club)と呼称され、早くに専らイギリス軍が駐屯した83番の一角に建てられたものであった。

居留地83番は484坪の地所で、この敷地内に大小七つの家屋が建てられ、主にイギリス軍が宿舎として使用していたところであったが、1864年に入るとイギリス軍のための新しい兵舎が山手に新築され、兵士たちは山手に居留するようになった。このため、多くの空きがでた83番の家屋は、1864年12月に入りいくつかの小さな家屋を残して売りにだされることになった。

1862年夏にソンダースが新しい「クラブ・ハウス」として紹介したこのクラブが、いつ頃まで存続していたか定かではない。常識的には、1864年12月にイギリス政府の所有する83番の家屋が売りにだされるまでであったとみなしたいが、はたしてどうであろうか。ただ、1864年1月にクリフトン商会が97番にピアソン夫人(Mrs. R. C. Pearson)によって開かれた時の広告文では、「横浜クラブに隣接する97番」とあり、さらに建築家・カイザー(Iwan Kaiser)の事務所が1864年2月に84番で開かれた時の広告文では「イギリス・クラブの真向い」とあるだけに、少なくともこのクラブ

は1864年春頃まで83番にはあったことになる。

1862年夏頃に設立された「横浜ユナイテッド・クラブ」がだれの手で運営されたのか、活動内容や会員数などはどうなっていたかといった点は全く記録がない。イギリス軍人たちの溜り場で、リンダウ (R. Lindau) の語る「若者だけの社交界」で、酒でも飲んで楽しむ程度のクラブだったのであろう。だからこそ、もうひとつのクラブが居留地内で誕生することになったものと考えられる。

1863年(文久3)12月1日、イギリス近衛海兵隊所属のスミス中尉 (W. H. Smith) の定唱で、設立されることになった「ユナイテッド・サービス・クラブ」(United Service Club) の新しいクラブ建物がオープンされた。この新築されたクラブには劇場の施設が設けられ、ボーリング場も併設されていた。

「ユナイテッド・サービス・クラブ」の会員資格は、公使館や領事館で働く職員や軍人といった公職につく関係者に限られ、横浜居留の貿易商人たちは準会員(名誉会員)の形で入会を認められていたが、クラブ運営や議決の面では一切発言権がないといったように、クラブ設立当初ははっきりと一線が引かれていた。会費は1ヵ月に5ドルとかなり割高であったが、それでも友人たちを食事に招いたりするには便利なクラブであった。

クラブ設立当日は、まず横浜アマチュア劇団 (Amateur Theatricals) の演ずる「ダイヤモンド・カット・ダイヤモンド」(Diamond Cut Diamond) などの出し物でクラブ劇場のこけら落としがなされた。¹⁴⁹⁾ この素人芝居は居留地で公演された演劇としては最も古いもののひとつで、アマチュア音楽会が初めて演奏されるようになったのも1863年のことであった。山手にフランス軍が駐屯し、さらに大勢のイギリス兵が来港した時だけに余暇の楽しみ方も多様化した。

「ユナイテッド・サービス・クラブ」の新しい建物ができ上って一年後の1864年12月15日、このクラブに付属するボーリング場の裏手にあった従

業員の宿舎より火をだし、たちまちのうちにクラブやボーリング場は火に包まれ、焼け落ちた。¹⁵⁰⁾この夜はかなりの風が吹いていたため、風下にあたる「コマーシャル・ホテル」(86番)や道を挟んだアルマン商会(Allemand & Co., 67番)などにも延焼するのは必至だと予測された火災であったが、ホテルなどへの延焼は幸い免れた。

ところで、「ユナイテッド・サービス・クラブ」のあった地番だが、この火事と1864年3月にアルマン商会が移転してだした広告「本町通り67番、ユナイテッド・サービス・クラブ先の次の角¹⁵¹⁾」との記録から判断して、83番の「横浜ユナイテッド・クラブ」とは別の85番にあったのではなかったかと思いたくなってくる。仮に、「ユナイテッド・サービス・クラブ」も先にあった83番の敷地内にあったとすれば、先の火災の折に86番のホテルが危なくなる前に、84番にあったカイザーの事務所、メディカル・ホール(Medical Hall)やファール・ブランド商会(Fabre Brand)、さらに85番の一角にあったベンソン(E. S. Benson)の所有する家屋などが焼け落ちていなければならなかったからである。

1863年12月1日に設立された「ユナイテッド・サービス・クラブ」は1864年12月15日に焼上したが、その地番は85番であったと定唱しておく。明治に入ってから古い居留者が「クラブ・ストリート」とも呼んでいたのは、居留地83番や85番にクラブが存在していた名残りで、おそらく本町通りに面していたのではなく、日本名で「長崎町」と呼称された一本奥に入った通りに建てられていたからであろう。

「ユナイテッド・サービス・クラブ」は火災後に、83番の「横浜クラブ」のメンバーと話し合いもたれ、このクラブに統合されていった。ブラック(J. R. Black)が『ヤング・ジャパン』の中で、W. H. スミス中尉の指揮で設立された「ユナイテッド・サービス・クラブ」が、後に「横浜ユナイテッド・クラブ」に併合されるようになると書いたのは先の事情を指している。

1865年3月、スミス、リッカービー (Chales Rickerby), エリアス (Ellis Elias) らのイギリス人を中心とする新しい委員会が設立され、「横浜ユナイテッド・クラブ」の新しい「クラブ・ハウス」建設に関する話し合いがもたれた。6月に開かれた同クラブの定例会議では、居留地76番の952坪の地所を購入し、ここに「クラブ・ハウス」を4万ドルの予算で新築しようとの極めて具体的な提案がなされた。¹⁵²しかし、この地番に新しい「クラブ・ハウス」が建てられることはなかった。

1865年頃に「横浜ユナイテッド・クラブ」の活動がどのようなものであったか不明だが、ボーリング大会だけは再三に渡って開催されており、軍人と民間人との対抗試合などが組まれたりしていた。「ボーリング場での光景」と題するワグマンの画に、スペアーを取って喜ぶ姿とそれに失敗して残念がる写真家・ベアトの姿を描いたものがあり、1866年前半のものである。このクラブで開かれた大会の一場面だったろう。他に、W. H. スミスの提唱で「フート・ボール・クラブ」が設立されもしたが、会員数約150人を数えただけに娯楽は欠かせなかった。



図版で示した「横浜ユナイテッド・クラブにみる若き日本」と題する絵は1866年1月のもので、惣髪、袴を細く仕立てたズボン風のものとお靴を履き、かなり短く詰めた羽織を着た日本人が、「拙者は文明だけが好きでござる」と語りかけている。その左手には葉巻を、右手にグラスを手にした青年は当時のハイカラ中のハイカラであった。初代駐英大使で後の外務大臣・林董の回顧によると、青年が手にするグラスは「麦酒コップ」であったというが、林は英国留学に備えヘボン夫人から英語を習っていた時期なだけに、このポンチ画の青年が彼の友人をモデルにしたものだと語るのは本当のことだったのだろう。

居留地83番時代の「横浜ユナイテッド・クラブ」はボーリング場の他に、この画のようなバーも併設されていたわけだが、居留地内の会員制のクラブとはいえ日本人の限られた人たちの出入りは自由だったものとみえる。しかし、この時代に宿泊したとする記録はない。

1866年夏にクラブは海岸通り五番に移転したが、それまでは83番に依然としてあった。1866年8月に82番のマッケニー商会 (A. McKechnie & Co.) がだした広告には、「弊社隣り83番、先ごろユナイテッド・サービス・クラブ所有の敷地」とある。居留地83番は先に記述したように総坪数は484坪で、イギリス政府の所有する地所であったが、1864年暮れに売りにだされたあと、その大部分に当たる448坪はアメリカ領事・フィッシャー大佐 (Geo. S. Fisher) の住いとして当てられていた。したがって、「クラブ・ハウス」が建っていた地所は36坪程度のものとなり、当時の会員数152名（海兵隊を除く）が利用する施設としては手狭なクラブの建物だったわけである。

83番にクラブがあったとする証言をもうひとつ引用しておこう。「横浜ユナイテッド・クラブは当時は非常に小さなもので、本町通り83番あたりの仮りの建物の中にあったが、1866年の大火の前に、現在クラブ・ホテルが立っている海岸通り五番の新しい建物に引っ越した。¹⁵³⁾」

このふたつの引用から若干、考察を加えてみると、1865年春から夏にかけて居留地76番に新しいクラブを設立しようとしたが、何らかの事情で、敷地もほぼ同じ918坪を持つ海岸通り5番に移転先が決定され、1866年7月頃に新しい「横浜ユナイテッド・クラブ」の建物が開設されたわけである。

新しいクラブはW. H. スミスの手で運営され、各国の新聞や雑誌を手にとって読める読書室、バー、ビリヤード室を伴った会員制のクラブであった。このクラブ組織の社交場は、1866年11月26日の大火では奇跡的に焼け残った。俗にいう豚屋火事で、居留地の5分の1がその犠牲となり、海岸通りも1番から8番までが火に包まれたり、延焼を断ち切るために爆破された。居留地5番Bにはファン・デル・タク (**Van der Tak**) のオランダ貿易商会があったが、この家屋はキング提督の命によって吹き飛ばされることになった。ところが、この家の残骸に火が燃え移り、隣接した5番のクラブにも火が付いたが、スミスらの迅速な消火作業によってなんとか焼失を免れたものの、先の爆破によってかなりの破損を受けた。

修復された「横浜ユナイテッド・クラブ」は、その後、長い間に渡って横浜居留地社会の社交場となり、同時に居留地をリードする役割をはたしていくようになるが、それだけに風当たりもすこぶる強かった。例えば、1866年代に大量にワインを輸入しては、その販売に力を入れたために批判されたり、スミスが牧師・ベイリー (**M. B. Bailey**) の「万国新聞紙」(慶応3年2月中浚) に、当方に牡豚二疋いるので、牝豚を持っている人は御連絡願いたいとの広告をだしたため、「横浜ユナイテッド・クラブ」はワインと豚肉販売店かと皮肉られ、ワーグマンのポンチ絵の諷刺の対象にされたりしたのであった。

当時の横浜居留地では、あまり品質の良くないワインを商人から入手するのに法外な代金を支払わなければならない、領事館員や山手の駐屯兵たちは仲間と相談して本国から直接これを輸入していた。これらワインや

ビールを仲間内で分け合ったあと、残りの分をかなり有利な条件で商人に引き取らせて儲けることが横行した。イギリス二十連隊の名で、品物を販売する広告がだされたりもするののもこの時期のことである。

先に触れたバックワース・ベイリー師はイギリス公使館付牧師で1862年8月に来日したが、彼の名は1867年から1869年にかけて「万国新聞紙」を発行したことでその名が知られている。しかし、居留地内では毎年子供を産ます男という方で有名で、事実彼の妻は1867年まで1年に1度出産を繰り返し、この年まで9人の子供を産んでは医者ウィリス(W. Willis)を悩ましていた。また、家庭内の醜聞などから居留地ではかなり毛嫌いされていた男であった。

このクラブの特徴のひとつは、宿泊施設を持っていたということであった。ここには、旅行者であれば誰れでも自由に泊まれるというものではなかったが、会員の紹介があったり、その場でなにがしかの金額を払って特別会員となることで宿泊が可能であった。1868年当時のこのクラブの模様を、モスマン(Samuel Mossman)はこう書いている。

「ヨーロッパ的なくつろぎを持った宿泊施設の唯一の改善は、たとえ豪華ではないにしても、居留地社会、旅行者、陸海軍士官たちの便宜のために、ゆったりとしたクラブ・ハウス(club-house)を建設したことであった。ここは最も有能なクラブ・マスターであるW. H. スミス氏に任されていて、彼はひとり1日3ドルで宿泊や下宿をさせ、食事だけの居留者にはその半額としていた。読書室にはイギリスや外国の新聞がきちんと読めるようにしてあった。¹⁵⁴⁾」

1866年7月に居留地5番に移転した時から、すでに宿泊できる施設を有していたと思われるが、その頃の記録はない。あるいは、この年の大火の後の改築の段階で建て増されたのかも知れない。いずれにしろ、1868年代

には「横浜ユナイテッド・クラブ」は会員制のホテルを経営し、その後のクラブの事業は専ら宿泊客のもてなしに力が注がれていった。

1866年に「横浜ユナイテッド・クラブ」の責任者として指名されたW. H. スミスは、1871年2月に開かれた同会の会合の席上で、クラブはさらに5年間彼の手で運営されていくことが決定された。この席では、当会の事業はホテル経営に力を入れ過ぎたきらいがあるとの反省意見がだされ、もう少し会員相互の親睦や文化事業にも目を向けるべきだとの批判もでた。

1876年にスミスはクラブの責任者の任を解かれたが、その裏には金銭がらみの問題が生じて、スミスはクラブを去る羽目になったと、古い居留者が後にそう回想している。スミスの去った後のクラブの運営をだれにまかせるか、さらにどのような経営をしていくかで、この春のクラブは議論百出で荒れに荒れ、会員相互の反目や不信感が大いに募った。これを收拾するため、アメリカ総領事のヴァン・ビューレン将軍 (**Van Buren**) やハワイ領事のフィッシャー (**Edward Fischer**) といった有力者が担ぎだされ、結局ヴァン・ビューレンが会長になることで一時的に事態は収まったのであった。

1867年以降の「横浜ユナイテッド・クラブ」は、年度毎に会長、副会長、運営委員が会員より選出され運営されていくようになるが、会長にはウィルキンソン (**Wm. Wilkinson**)、ホイタール (**E. Whittall**)、フィッシャー博士 (**J. W. Fisher**)、ラウダー (**J. F. Lowder**) といった横浜居留地の名士が顔を連ねていった。

1884年(明治17)1月、「横浜ユナイテッド・クラブ」は「クラブ・ホテル」として改修され、フランス人に貸されオープンされることに決まったため、クラブそのものは前年の暮れに居留地5番の一角に移転することになった。これ以降、「クラブ・ホテル」は5番B、「横浜ユナイテッド・クラブ」は5番Aと地番が記載されるようになっていったが、もちろん隣り同志の建物であった。

5 番 A に移転したクラブの建物だが、これは 1882 年 2 月に売りにだされた「オランダ貿易商会」の家屋が一部手直しされ、そのまま利用されたものとみなされる。ただし、クラブの建物は新しいものであったとする旅行者の手記もあることから、古い家屋の改築ではなく新築された可能性もないではない。新築されたとすれば居留地では話題になり、当然その頃の新聞記事に取り上げられたはずだが、そのような記述は見当たらない。明治 30 年代の絵葉書での「クラブ・ホテル」と 4 番の太平洋郵船 (P. M. S. S.) との間にみられる二階建てベランダを持つ建物がクラブのそれだったと考えられる。

1878 年 (明治 11) にたまたま一時的に横浜に立ち寄り、1884 年 3 月 20 日に再来日したイギリス人・ロナルド・ガワー卿 (Ronald Gower) は、この折約 1 ヶ月日本に滞在し、帰国後の 1885 年に『ブリンディジから横浜への旅行記』(“Notes of a Tour from Brindisi to Yokohama 1883-1884”) を刊行した。ガワーはヴァン・ブューレンに送別会を開いてもらったこともあってか、「クラブ」の印象はすこぶるよく、横浜の一等地にビリヤード室とボーリング場を備えてあり、洗練された料理、会員の質の良さを讃えている。

1889 年 (明治 22) 1 月 2 日、「横浜ユナイテッド・クラブ」の台所より火を出し、図書室に大きな被害をもたらし、さらに隣りのホテルにも火が付いたが幸い大事に至らなかった。このようなボヤ騒ぎはときどきあって、1897 年 1 月や 1902 年 (明治 35) 11 月 18 日に、かつてビリヤード室があった一角より火をだしたりもした。

1901 年夏、「横浜ユナイテッド・クラブ」は 5 番から隣地 4 番に移転したが、その建物は海岸通りでもきわだって美しい煉瓦造り三階建ての豪壮な太平洋郵船会社の家屋であった。この移転により、5 番の旧「横浜ユナイテッド・クラブ」の建物は改修され、「クラブ・ホテル」の一部として吸収されていった。

1884年の「クラブ・ホテル」の項ですでに記述した通り再三に渡って火災を出しているが、新しく移転した「横浜ユナイテッド・クラブ」も1908年（明治41）2月17日に火を出し、ビリヤード室などを完全に失ったほか、クラブ施設のかなりの部分を焼失し、その損害額は6万円にも上った。

「横浜ユナイテッド・クラブ」の定期総会の案内など断片的な記録は1880年代に若干あるが、特にW. H. スミスが去った後のクラブの活動がどのようなものであったのかを伝える資料は全くない。1872年（明治5）に設立され、長い間に渡って極めて高度で秀れた内容を持つ多くの論文を発表し、横浜居留地社会ばかりでなく多方面に大きな影響を与えた「日本アジア協会」(**The Asiatic Society of Japan**)、これより遅れて活発な講演や文化活動を勢力的にこなした「ジャーマン・クラブ」(**Club Germania**)とは対象的な相違をみせている。

「日本アジア協会」と「ジャーマン・クラブ」は学術団体で、「横浜ユナイテッド・クラブ」の方は社交団体だったと言ってしまうまでもだが、後者の資料が極めて乏しい。

1884年1月の「眠れる見張り」と題するワーグマンの諷刺画は、5番のクラブの体質を揶揄しているようにみえる。

「ユナイテッド・サービス・クラブ」が1863年12月に設立されたが、その設立と維持に長いこと盡したW. H. スミスについて少し触れておこう。回想する人たちの記録の中に必ずといっていいほど姿を現わすスミスは、「パブリック・スピリットド・スミス」(**Public-Spirited Smith**, 公共心旺盛なスミス)と呼ばれて登場するだけに居留地社会では人望が厚く、実にさまざまな公共的な事業に盡力した人物であった。それを裏付けるように、横浜居留地を厳しい目で描き続けたワーグマンの『ジャパン・パンチ』では最も数多く話題に取り上げられており、また記録によっては単に「P. S. S.」の略字で書かれてさえいたりする。

W. H. スミス（以下スミスと略）のフル・ネームだが、「Wm.」と記述

したものもあるので、ウィリアム・ヘンリーが名だったと考えられる。スミスの来日は1862年だったらしく、アーネスト・サトウは「第67連隊のプライス中尉に指揮されていた護衛の歩兵は、まもなく50名の水兵と交代し、彼らはパブリック・スピリット・スミスとして所属部隊にその名が広く知れ渡っている男の指揮下にあった¹⁵⁵⁾」と1862年の項で書いている。

プライス中尉 (Lieut. Price) と67連隊の27名のイギリス兵が英艦で上海より横浜入港をしたのは1862年(文久2)8月24日のことだが、このすぐ後の9月14日には生麦事件が起こり居留地内の警護は一段と強化されていた。スミスの来日はこんな混乱の真中だったと想定される。ブラックもスミスのことを「近衛海兵隊騎兵のスミス中尉」として紹介しているだけに、軍人として来日したのは間違いないようである。

文久3年(1863)12月、池田筑後守一行34名は横浜鎖港とカミュ事件の謝罪のためフランスへ派遣されたが、一行は往路の途中、上海の「アスター・ハウス」(Astor House)に投宿した。このホテルは1860年から1862年後半にかけて「H. W. スミス」が持ち主であったが、このスミスと今ここで話題に取り上げた「W. H. スミス」とは全くの別人であったものか気にかかる。スミスは横浜でホテル経営に手を染めるようになり、上海の「アスター・ハウス」が1864年代にはジョン・メーホンに代替わりをしているだけに、思い切って別人と断定できないところがある。

近衛海兵中尉のスミスは、1863年に「ユナイテッド・サービス・クラブ」の設立に奔走し、この年の暮れに同クラブの建物を居留地85番に新築した。しかし、このクラブは1年後の1864年12月に火災で失ったため、83番の「横浜ユナイテッド・クラブ」と統合することになり、スミスはこの責任者となって、1876年(明治9)までその地位にあった。

この間、スミスはクラブの新しい規約を作成し、まず新しく埋め立てられた居留地131番にイギリス女性ふたりを作業監督に雇い入れ、1865年11月に洗濯屋を始めた。文久年間にすでに洗濯屋を商売としていた者は他に

もいたので、スミスの洗濯屋が皮切りというわけではなかったが、「ジャパン・ヘラルド」や「ジャパン・タイムズ」紙にまで大々的に広告を掲載しては、洗濯稼業を宣伝したのはスミスが初めてであった。この洗濯屋は話題になったらしく、陣頭指揮をとるスミスを描いた絵がある。¹⁵⁶⁾¹⁵⁷⁾

1865年（慶応元）11月1日開店を伝える新聞の広告によると、朝の8時に依頼を受ければ、受取書と引き換えに午後5時には洗濯物はお返しすると、なかなか迅速である。また、手間賃は100枚につき2ドル75セントであると明記しているのもおもしろい。この当時の1ドルは約1円であったから、洗濯物1点につき2銭7厘5毛となるわけで、小物1枚の値としてはかなり高い洗濯代となる。この商売からスミスは手を引いたものか、まもなく新聞広告は掲載されなくなっていった。なお、この頃の新新聞広告には、「スミス中尉に対し債務を負わせている者は支払われたい」との記事があるので、他にもなにか事業に手をだしていたのであろう。

1865年9月のこの洗濯屋の賑いを描いたワグマンの絵の看板に「Mangling」とあるが、これはローラーによる仕上げの意味だが、きちんとしわを延ばしてプレスしますといった意である。なお、この収益は慈善事業に寄付されることで発足したが、どの程度の利益があったものか定かでない。1867年以降の記録をみると、131番の洗濯屋はハットン（Alfred Hutton）夫人の経営となっており、1878年（明治11）までこの地番で営業が続けられていた。

話しは横道にそれるが、谷戸坂を登り切る一隅に、つい見逃してしまいそうな小さな碑が今もある。「クリーニング業発祥の地」と横書きした下に、その由来が書かれていて、そこには「安政六年神奈川宿の人青木屋忠七氏西洋洗濯業を横浜本町一丁目現在の五丁目にて始めついで岡沢直次郎氏横浜元町に清水屋を開業慶応三年脇沢金次郎氏これを継承し近代企業化の基礎を成した この間フランス人ドンバル氏斯業の技術指導および普及発展に貢献された（後部略）」と刻まれている。

クリーニングの皮切りについては異説もないわけではないが、谷戸坂附近に脇沢金次郎が洗濯屋を開き、イギリスの二十聯隊などの洗濯物を一手に引き受け、後に金満家になったのは事実である。ところが、技術指導をしたというフランス人・ドンバルに関しては全く知られてなく、彼について触れた記録は全然ない。現在、あちこちに「ドンバル」というパン店が店を開いているが、これは神戸でパン店の経営をしていたドルバルの流れを汲むもののようである。

ドルバルという名前は比較的珍しい名前なので、1880年（明治13）代に山手居留地に住んだドンバルと、1890年（明治23）代に神戸三宮で洋酒販売をするかたわら、パンの製造販売をしたドンバルとは同一人物ではないかと推定し、思いきってドンバルという名の家を神戸に訪ねた。今から20数年前のことだが、80歳を越えたと覚しいこのドンバル（**Paul Domballe**）氏は、父は横浜に長く住んでいて、クリーニング業にも手を染めていたことがあると話してくれた。元々は、船乗りとして横浜にやってきたようだが、彼の父であるフェリックス・ドンバル（**Félix Domballe**）こそ間違いなくクリーニングと関わりを持った人物だったようである。

1866年（慶応2）になると、スミスは居留民の憩いのために公園を造ろうと企画し、さらにフット・ボール・クラブの設立を呼びかけた。居留民大会が開かれ、横浜に公園を持とうという案は強い賛同を得たため、スミスは山手地域を歩き回り、その東端に最適の場所を捜しだすと、神奈川奉行にその土地の借地を与えるように求めた。

スミスはここに一般には入手できないようなさまざまな樹木を植え、一大庭園にしようと夢みしたが、実際には企画は失敗に終り、山手公園は一般の人たちから見過ごされていった。それでもスミスは全くの独力で、この地に西洋野菜や果物の種を蒔き、さらに豚や牛を飼育し、まずは庭園というより牧場兼農園としてこの場所を守っていった。1867年春には、農園経営はまずまずの収益を得るようになり、この間に大勢の日本人に野菜の作

り方や保存法を教えたこともあって、居留地で消費する野菜類は十分に満たされるほどであった。多くの人々の証言を引用するまでもなく、西洋野菜と果物の大部分は、スミスとベイリー牧師によってもたらされたとするのは、あながち誇張ではなかった。

山手公園は農園の形をとりながらスミスによって管理され、1870年（明治3）には育成された樹木がきれいに刈り込まれ、色とりどりの草花が植えられ、居留地の人々は山手公園の小径を散策し、素晴らしい景観を楽しむまでになっていた。スミスがいなかったなら、この公園はとうに日本側に返還されていたことを知っていた居留者たちは、彼が寸暇をさいて居留地社会のために尽くしたことから、「公共心旺盛なスミス」(**Public-Spirited Smith**)と彼を呼ぶようになった。1870年8月公園理事の選挙で、彼が最高票を得たのもこうした背景があったのだった。

この公園は景色を楽しむばかりでなく、時にはドック・ショーやフラワー・ショーが開かれ、音楽会もよく開催された。とりわけ、1872年（明治5）にはよくこの山手31番の公園では催し物が開かれ、木戸銭1分で「草木禽獣などの珍物見物」と名打って、小鳥や小動物をも見せている。こうしてあげた利益は、公園の維持費、テニスコートの設置、奏楽台の建設費等にあてられたが、数名よりなる公園の運営は火の車であった。

横浜公園や山手地区にみられるヒマラヤ杉は、「ジャパン・ヘラルド」や「ジャパン・メール」の編集長をし、30年もの長い間横浜で報道にたずさわったブルーク (**John H. Brooke**) が、第二の故郷たる日本にもたらしたもので、それを育成したのが娘婿のスミスであった。あちこちの公共の場に美観を添えることになるヒマラヤ杉にもスミスは関与していたのである。

横浜ユナイテッド・クラブの設立、山手公園の開設に尽し、野菜栽培が十分に生計に見合う産業となることを教えたスミスは洗濯業を始め、煉瓦製造を紹介し、さらにガズ灯の点灯、居留地内の消防組織、山手外人墓地の編成等に尽力し、「グランド・ホテル」の経営者となっていた。この頃

までがスミスの人生の華で、その後は忘れられた存在となった。「グランド・ホテル」の項で記述したように、このホテルの経営は必ずしも順調に運ばず、出資者の何人かが手を引き、かなりの負債を抱えることになったスミスは結局このホテルを手離なし、「横浜ユナイテッド・クラブ」も去った。クラブを去ることになった原因は財政問題にあったのだが、おそらく「グランド・ホテル」と絡むものがあっただろう。

クラブから完全に手を引いたスミスは妻と子連れ、1877年（明治10）秋に兵庫に向かうと、この122番にあったワトソン商会（E. B. Watson & Co.）の神戸支店で働くようになった。2年ほどを神戸で過ごしたスミス夫妻は、再び横浜に戻り、46番のワトソン商会に勤め、自分たちは山手39番に居留した。この後10年間ほどのスミスの動向はかなり目まぐるしく、「ジャパン・ヘラルド」紙のレポーターをしたり、チャータード銀行で働いたりし、さらに再三に渡って神戸や上海に旅している。この辺りの事情は、やはり定職を求めての旅だったとみなされる。

1888年（明治21）から約3年間名古屋で商売をし、ここで娘が誕生したが、1891年には横浜に戻り、「ジャパン・ガゼット」紙のマネージャーとなった。この時、スミス夫人は同紙の編集長となったが、同紙との関わりは短期間で終った。スミスは1892年（明治25）5月17日にカナダ太平洋汽船の「エクスプレス・オブ・インディア」号に乗船すると、バンクーバーへ向ってしまうからである。

スミスは農業で成功した腕を生かして、この地で農園・牧場を経営することを夢みたが、厳しいカナダの冬には勝てずまもなくここで逝去してしまった。

最後に、スミス夫人について少し触れておきたい。「ジャパン・ヘラルド」紙の社主・編集長であったJ. H. ブルークにはガーティー（Gertie）とマーベル（Mabel）のふたりの娘がいた。姉のガーティーの方は、来日した直後から大型のオーストラリア産の馬を巧に乗り回していたことから若

者たちの目を惹き、時折開かれる居留地のダンス・パーティーでは人気を独占するといったように、とかく注目された美しいレディーであった。

居留地社会の華であったガーターと、ここでめざましい活動をみせた「パブリック・スピリットド・スミス」との結び付きは極く自然の成り行きだったわけで、スミスが「ジャパン・ヘラルド」紙などに関わりを持ったのには義父・ブルークーが絡んでいたものであった。

1907年(明治40)4月に天津で亡くなった人に、W. H. スミスという男がいる。彼もまた横浜で刊行されていた英字新聞社やフレーザー商会で働いた人物だが、ことによったらこれまでに述べてきたスミスの息子であったかも知れない。スミスの息子たちは、1900年代には極東で働いていただけにその可能性は大いにありうる。

図版は1870年(明治3)10月のワーグマンの絵で、ビールのジョッキーを手にしているのがスミスである。彼の背後の馬車は、「江戸・横浜メイル」と書かれているので、居留地で最も早く馬車会社を始めたランガン(W. Rangan) かサザーランド(J. W. Sutherland) 馬車会社のものであろう。

The combination stable



スミスと馬車会社との関連はつきとめられていないが、こういう図がある以上なんらかの関わりがあったとみなされる。ビールの図としても貴重なもので、この年に日本で初めてビールが醸造できるようになっただけに、ビールを描く最も古い図ということになろう。

横浜居留地ホテルの全貌を解明できたとは想っているわけではないが、この程度まで調べが進んでいるという意味で発表に踏み切ることにした。調査の段階で、あちこちの図書館や資料館で、箇別のホテル史を追跡している人たちに会ったり、また質問を受けたりもしただけに、拙稿も少しは利用価値もあろうかと判断したからである。

近年、古き横浜についての関心がとみに強まっているため、ホテルそのものとは直接に関連はないが、一般には調査・追跡に手間どり、ほとんど記述もないまま見逃されてきた若干の事柄にも目を向けて記述してみた。これらも少しは役立つものと考えている。

注 120) ‘The Japan Gazette’, 1881.5.10.

121) 拙稿「横浜居留地のフランス系ホテル」(『敬愛大学研究論集』第34号。149-150頁)。

122) 拙稿「アルフレッド・ジェラルド」(『千葉敬愛大学研究論集』第32・33合併号。195-242頁)。

123) ‘L’Echo du Japon’, 1880. 1. 22.

124) Ibid., 1884.1.28.

125) ‘The Japan Weekly Mail’, 1890. 5. 24.

126) Ibid., 1898. 6. 4.

127) Ibid., 1910. 1. 1.

128) “The Japan Directory for the year 1885”, 卷末広告頁。

129) “The Japan Directory for the year 1886”, 卷末広告頁。

130) “The Japan Directory for the year 1889”, 卷末広告頁。

131) ‘The Japan Weekly Mail’, 1894. 11. 24.

132) Ibid., 1893. 3. 11.

133) “The Japan Directory for the year 1900”, 卷末広告頁。

134) ‘L’Echo du Japon’, 1881. 6. 14.

- 135) 'The Japan Weekly Mail', 1898. 6. 4.
- 136) Ibid., 1898. 4. 30.
- 137) Ibid., 1901. 11. 23.
- 138) Ibid., 1903. 10. 10.
- 139) Ibid., 1910. 1. 1.
- 140) 'The Japan Gazette', 1913. 7. 31, 1913. 8. 2.
- 141) 'L'Echo du Japon', 1880. 7. 8.
- 142) 'The Japan Weekly Mail', 1892. 4. 30.
- 143) 'L'Echo du Japon', 1876. 9. 5.
- 144) 'The Japan Weekly Mail', 1872. 5. 4.
- 145) 'L'Echo du Japon', 1880. 7. 19.
- 146) 'The Japan Weekly Mail', 1898. 9. 17.
- 147) 石井研堂『明治事物起源』895頁。
- 148) M. Paske-Smith. "Western Barbarians in Japan and Formosa in Tokugawa Days 1603-1868" (1930), P.271.
- 149) 'The Japan Herald', 1863. 12. 5.
- 150) Ibid., 1864. 12. 17.
- 151) Ibid., 1864. 3. 5.
- 152) Ibid., 1865. 6. 3.
- 153) "Japan Gazette Yokohama Semi-Centinnial" (1909), p.56.
- 154) Samuel, Mossman. "New Japan" (1873), pp.350-351.
- 155) Satow, Ernest. "A Diplomat in Japan" (1921), p.32.
- 156) 'The Japan Herald', 1865. 10. 21.
- 157) 'The Japan Punch', 1865. 9.